

目次

第 1 章	Introduction	1
1.1	ホモトピー	1
1.2	基本的な空間	3
1.2.1	\mathbb{R}^n	3
1.2.2	D^n, S^{n-1}	4
1.2.3	C, C^n	5
1.2.4	H, H^n	7
1.3	可除代数	9
1.4	圏	11
1.4.1	圏	12
1.4.2	関手	13
第 2 章	ホモトピー	15
2.1	ホモトピー	15
第 3 章	基本的な空間及び構成	19
3.1	部分空間を一点に縮めた空間	19
3.2	球面, キューブ	23
3.3	射影空間	26
3.4	写像空間	26
3.4.1	随伴	27
3.4.2	基点付きの場合	29
3.4.3	ループ	32
第 4 章	Fibration と Cohomology	35
4.1	Cohomology	35
4.2	Fibration	35

2020 年度 幾何学特論 I
ホモトピー論入門

佃 修一

2020 年 7 月 3 日

4.3	Lebesgue の補題	35
4.4	Hopf fibration	35
4.5	Puppe 列	35
第 5 章 ホモトピー群		
5.1	ホモトピー群	37
5.2	完全列	45
5.3	Blakers-Massey	45
5.4	Preudenthal	45
5.5	計算例	45
付録 A 予備知識		
A.1	像と逆像	47
A.2	同値関係	48
A.3	群の作用	49
A.4	部分空間	51
A.5	直積空間	52
A.6	商空間	53
A.7	ハウスドルフ空間	54
A.8	コホモロジー空間	55
A.9	コホモロジー空間 Hausdorff 空間	57
A.10	コホモロジー距離空間	59
参考文献		
61		

2020 年度前期「幾何学特論 I」の講義メモ.
tom Dieck [5], Gray [2], 西田 [7], May [4] を参考にホモトピー論入門をやってみる.

List of exercises

exercise1	5
exercise2	8
exercise3	12
exercise4	15
exercise5	16
exercise6	17
exercise7	21
exercise8	38
exercise9	40
exercise10	42
exercise11	42
exercise12	43
exercise13	52
exercise14	52
exercise15	53
exercise16	54
exercise17	54
exercise18	59

1.2.3 \mathbb{C}, \mathbb{C}^n

複素数体の定義の仕方は色々あるが, このノートでは以下の定義を採用する.

Definition 1.2.8. \mathbb{R}^2 における和, 積を次のように定めると体となる.

$$(a, b), (c, d) \in \mathbb{R}^2 \text{ に対し}$$

$$(a, b) + (c, d) = (a + c, b + d) \\ (a, b)(c, d) = (ac - db, da + bc).$$

この体を複素数体とって \mathbb{C} で表す¹. \mathbb{C} の元を複素数という.

すぐわかるように和に関する単位元は $(0, 0)$, 積に関する単位元は $(1, 0)$ である.

exercise 1.

$$1. (a, b)(c, d) = (c, d)(a, b). \\ 2. (a, 0)(b, c) = (ab, ac).$$

さて

$$(a, 0) + (c, 0) = (a + c, 0) \\ (a, 0)(c, 0) = (ac, 0)$$

であるから $a \in \mathbb{R}$ と $(a, 0) \in \mathbb{C}$ を同一視して $\mathbb{R} \subset \mathbb{C}$ とみなす. もう少し形式的にいうと

Proposition 1.2.9. $f(a) = (a, 0)$ で定まる写像 $f: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{C}$ は体の (単射) 準同型である. \mathbb{C} は \mathbb{R} の 2 次拡大体である.

$$(0, 1) \in \mathbb{C} \text{ を記号 } i \text{ で表す.}$$

$$i^2 = (0, 1)(0, 1) = (-1, 0) = -1$$

である.

任意の $(a, b) \in \mathbb{C}$ は

$$(a, b) = (a, 0) + (0, b) \\ = (a, 0) + (b, 0)(0, 1) \\ = a + bi$$

と表すことが出来る. $a, b, c, d \in \mathbb{R}$ であるとき, あきらかに

$$a + bi = c + di \Leftrightarrow a = c, b = d$$

$$d_1(x, y) = \sum_{i=1}^l |x_i - y_i|$$

で定めるとこれらは \mathbb{R}^n 上の距離関数であり, これらの定める位相はユークリッド距離の定める位相と等しい.

Proposition 1.2.2. \mathbb{R}^n の位相は, \mathbb{R} の n 個の直線空間としての位相と等しい.

Corollary 1.2.3. X を位相空間, $B \subset \mathbb{R}^n$ を部分空間, $f: X \rightarrow B$ を写像とする. このとき, f が連続であることと, 任意の $1 \leq i \leq n$ に対し, $p_i \circ f: X \rightarrow \mathbb{R}$ が連続であることとは同値. ただし, $p_i: B \rightarrow \mathbb{R}$ は, 包含と第 i 成分への射影 $\mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}$ の合成.

Proposition 1.2.4. 足し算, 掛け算, 逆数

$$\mathbb{R}^2 \ni (x, y) \mapsto x + y \in \mathbb{R} \\ \mathbb{R}^2 \ni (x, y) \mapsto xy \in \mathbb{R} \\ \mathbb{R} \setminus \{0\} \ni x \mapsto 1/x \in \mathbb{R}$$

は連続.

Corollary 1.2.5. 線形写像 $f: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}^m$ は連続.

Proof. 行列を使って書けば, 各成分は足し算と掛け算で書ける.

Theorem 1.2.6 (Heine-Borel). ユークリッド空間 \mathbb{R}^n の部分集合がコンパクトであるための必要十分条件は有界閉集合であること.

1.2.2 D^n, S^{n-1}

Definition 1.2.7. n 次元ユークリッド空間 \mathbb{R}^n の部分空間

$$D^n := \{x \in \mathbb{R}^n \mid \|x\| \leq 1\} \\ = \left\{x = (x_1, \dots, x_n) \in \mathbb{R}^n \mid \sum_{i=1}^n x_i^2 \leq 1\right\} \\ S^{n-1} := \{x \in \mathbb{R}^n \mid \|x\| = 1\} \\ = \left\{x = (x_1, \dots, x_n) \in \mathbb{R}^n \mid \sum_{i=1}^n x_i^2 = 1\right\}$$

をそれぞれ n 次元円盤 (n -dimensional disc), $n - 1$ 次元球面 ($n - 1$ -dimensional sphere) という.

Example 1.1.6 と全く同様にして D^n は可縮であることが分かる.

第 1 章

Introduction

1.1 ホモトピー

空間を分類したい!
位相空間を同相で分類するのは難しすぎる.

Example 1.1.1 (有限位相空間).

もう少しゆるい関係で分類しよう.

Definition 1.1.2. 閉区間 $[0, 1]$ を I で表す.

X, Y を位相空間とする.

1. $f, g: X \rightarrow Y$ を連続写像とする. 連続写像

$$H: X \times I \rightarrow Y$$

で, 任意の $x \in X$ に対し

$$H(x, 0) = f(x) \\ H(x, 1) = g(x)$$

をみたすものが存在するとき, f と g はホモトピック (homotopic) であるといい, $f \simeq g$ と書く. また, H を f から g へのホモトピー (homotopy) という.

2. 連続写像 $f: X \rightarrow Y$ は, 連続写像 $g: Y \rightarrow X$ で,

$$g \circ f \simeq \text{id}_X \\ f \circ g \simeq \text{id}_Y$$

をみたすものが存在するとき, ホモトピー同値写像 (homotopy equivalence) という.

$$ij = k = -ji \\ jk = i = -kj \\ ki = j = -ik$$

で定めた積³と一致する.

Definition 1.2.13. $q = (a, b) \in \mathbb{H} = \mathbb{C}^2$ に対し, $(\bar{a}, -b)$ を q の共役 (conjugate) といって \bar{q} で表す. $q = a + bi + cj + dk \in \mathbb{H}$ ($a, b, c, d \in \mathbb{R}$) と表したとき $\bar{q} = a - bi - cj - dk$ である.

exercise 2. $q = a + bi + cj + dk \in \mathbb{H}$ ($a, b, c, d \in \mathbb{R}$) と表したとき $\bar{q} = a - bi - cj - dk$ であることを確かめよ.

$$q = a + bi + cj + dk \in \mathbb{H} \text{ } (a, b, c, d \in \mathbb{R}) \text{ に対し}$$

$$q\bar{q} = (a + bi + cj + dk)(a - bi - cj - dk) \\ = a^2 - abi - acj - adk \\ + abi - b^2i^2 - bcij - bdik \\ + acj - bcji - c^2j^2 - cdjk \\ + adk - bdki - cdkj - d^2k^2 \\ = a^2 - abi - acj - adk \\ + abi + b^2 - bck + bdj \\ + acj + bck + c^2 - cdi \\ + adk - bdj + cdi + d^2 \\ = a^2 + b^2 + c^2 + d^2 \geq 0$$

である (可換ではないので計算には注意が必要) .

Definition 1.2.14. $\|q\| = \sqrt{q\bar{q}} \in \mathbb{R}$ を q の絶対値という.

\mathbb{C} の場合と同様に, \mathbb{H}, \mathbb{H}^n にこの絶対値を用いて距離を定めることが出来る. 距離空間として

$$\mathbb{H} \cong \mathbb{R}^4, \quad \mathbb{H}^n \cong (\mathbb{R}^4)^n \cong \mathbb{R}^{4n}$$

である. $4n - 1$ 次元球面 $S^{4n-1} \subset \mathbb{R}^{4n}$ は $\mathbb{R}^{4n} = \mathbb{H}^n$ と同一視すると

$$S^{4n-1} = \{q \in \mathbb{H}^n \mid \|q\| = 1\}$$

とみなせる. 特に

$$S^3 = \{q \in \mathbb{H} \mid \|q\| = 1\}$$

である。すなわち、任意の複素数 z は、

$$z = a + bi, \quad a, b \in \mathbb{R}$$

と一意的に表すことが出来る。

\mathbb{C} は可換体なので^{*} 普通に^{*} 計算をすることが出来る。例えば

$$(a + bi)(c + di) = ac + bci + adi + bdi^2$$

$$= ac + bci + adi + bdi^2$$

$$= ac - bd + (ad + bc)i$$

といった具合である。

Definition 1.2.10. $z = (a, b) \in \mathbb{C}$ に対し、 $(a, -b) \in \mathbb{C}$ を z の共役 (conjugate) と

いつて \bar{z} で表す。 $z = a + bi$ ($a, b \in \mathbb{R}$) と表したとき、 $\bar{z} = a - bi$ である。

$$z = a + bi \in \mathbb{C} \ (a, b \in \mathbb{R}) \text{ に対し}$$

$$z\bar{z} = (a + bi)(a - bi)$$

$$= a^2 - (bi)^2$$

$$= a^2 - i^2b^2$$

$$= a^2 + b^2 \geq 0$$

である。

Definition 1.2.11. $\|z\| = \sqrt{z\bar{z}} \in \mathbb{R}$ を z の絶対値という。

定義より、 $\|z\|$ は \mathbb{R}^2 におけるユークリッドノルムと同じものである。特に、 $z, w \in \mathbb{C}$ に

$$d(z, w) = \|z - w\|$$

と定めると、これは \mathbb{C} 上の距離関数である。もちろん、(我々の複素数体の定義では) 距離空間として \mathbb{C} は \mathbb{R}^2 そのものである。より一般に $z = (z_1, \dots, z_n) \in \mathbb{C}^n$ に対し、その

大きさを

$$\|z\| = \sqrt{\sum_{i=1}^n \|z_i\|^2} = \sqrt{\sum_{i=1}^n z_i \bar{z}_i}$$

で定め、 \mathbb{C}^n の 2 点 $z = (z_1, \dots, z_n), w = (w_1, \dots, w_n)$ に対し z と w の距離 $d(z, w)$ を

$$d(z, w) = \|z - w\|$$

で定めるとこれは \mathbb{C}^n 上の距離関数であり、

$$\mathbb{C}^n = (\mathbb{R}^2)^n \cong \mathbb{R}^{2n}$$

よってコンパクトで“よい”位相空間を弱ホモトピー同値で分類するには有限位相空間を

弱ホモトピー同値で分類すればよい。これなら、かなり現実的な問題と言えるだろう。

こんなに大雑把な分類をして何かの役に立つのかと思うかもしれないが、とても有用で

ある。

入門的内容の場合、Brouwer の不動点定理がよく例として挙げられるが、「幾何学 I」あ

るいは「幾何学 II」で扱われるであろうから、別の例を挙げよう。

1.2 基本的な空間

1.2.1 \mathbb{R}^n

の点 $x = (x_1, \dots, x_n)$ に対し、その大きさ (ユークリッドノルム) を

$$\|x\| = \sqrt{\sum_{i=1}^n (x_i)^2}$$

で定める。どこかで学んだことがあると思うが、次が成り立つ。

- (a) $\|x\| \geq 0$.

- (b) $\|x\| = 0 \Leftrightarrow x = 0$.

2. 任意の $a \in \mathbb{R}$ と $x \in \mathbb{R}^n$ に対し、 $\|ax\| = |a|\|x\|$.

3. $\|x + y\| \leq \|x\| + \|y\|$.

この定義では $\|x\|$ を $|x|$ と書くことがあるかもしれない。

\mathbb{R}^n の 2 点 $x = (x_1, \dots, x_n), y = (y_1, \dots, y_n)$ に対し x と y のユークリッド距離 $d(x, y)$ を

$$d(x, y) = \|x - y\|$$

Proposition 1.2.1. $d(\infty(x, y), d_1(x, y))$ を

$$d(\infty(x, y)) = \max_{1 \leq i \leq n} |x_i - y_i|$$

$$d(\infty(x, y)) = \max_{1 \leq i \leq n} |x_i - y_i|$$

$$d(\infty(x, y)) = \max_{1 \leq i \leq n} |x_i - y_i|$$

$$d(\infty(x, y)) = \max_{1 \leq i \leq n} |x_i - y_i|$$

$$d(\infty(x, y)) = \max_{1 \leq i \leq n} |x_i - y_i|$$

Example-Definition 1.4.2.

1. (Sets): 集合を対象とし、集合の間の写像を射、写像の合成を合成とする圏。

2. (Abel): アーベル群を対象、準同型写像を射、準同型写像の合成を合成とする圏。

3. (Top): 位相空間を対象、連続写像を射、連続写像の合成を合成とする圏。

4. ho(Top): 位相空間を対象、連続写像のホモトピー類を射、連続写像の合成を合成とする圏 (これが圏の条件をみたすことはいずれ示す)。

Definition 1.4.3. \mathcal{C} を圏とする。

1. 射 $f: A \rightarrow B \in \mathcal{C}$ が同型射 (isomorphism) である。

$\overset{\text{def}}{=} gf = 1_A$ と $fg = 1_B$ をみたすような射 $g: B \rightarrow A$ が存在する。このような射 g を f の逆射という。

$$A \begin{matrix} \xrightarrow{g} \\ \xleftarrow{f} \end{matrix} B$$

2. A から B への同型射が存在するとき A は B に (\mathcal{C} において) 同型であるといい、

$A \cong B$ と表す。

Example 1.4.4. $f: X \rightarrow Y \in ho(\text{Top})$ が同型射である $\Leftrightarrow f$ はホモトピー同値写像。

$X, Y \in ho(\text{Top})$ が同型 $\Leftrightarrow X$ と Y はホモトピー同値。

1.4.2 関手

Definition 1.4.5 (Functor). 圏 \mathcal{C} から圏 \mathcal{D} への関手 (functor) $F: \mathcal{C} \rightarrow \mathcal{D}$ とは以下

の 2 つの data (i) 写像 $F: \text{Ob } \mathcal{C} \rightarrow \text{Ob } \mathcal{D}$

(ii) \mathcal{C} の対象の各順序対 (A, B) に対して定められた写像 $F_{A,B}: \text{Hom } \mathcal{C}(A, B) \rightarrow \text{Hom } \mathcal{D}(F(A), F(B))$ を単に F と書く。

条件 (a) 任意の射 $f: A \rightarrow B \in \mathcal{C}, g: B \rightarrow C \in \mathcal{C}$ に対し、等式 $F(gf) = F(g)F(f)$ が成り立つ。

(b) \mathcal{C} の任意の対象 $A \in \mathcal{C}$ に対し、等式 $F(1_A) = 1_{F(A)}$ が成り立つ。

Lemma 1.4.6. $F: \mathcal{C} \rightarrow \mathcal{D}$ を関手とする。 $f: A \rightarrow B \in \mathcal{C}$ が同型射ならば特に、 $A, B \in \mathcal{C}$ について、 $F(A) \cong F(B)$ ならば $A \cong B$ である。

Proof. $f: A \rightarrow B \in \mathcal{C}$ が同型射であるとする。 $g: B \rightarrow A \in \mathcal{C}$ を f の逆射とする。すなわ

1.4.1 圏

Definition 1.4.1 (Category). 圏 (カテゴリー、category) \mathcal{C} とは以下の 3 つの data

(i) オブジェクト (object) という。

(ii) 対象の任意の順序対 (A, B) に対して定められた集合 $\text{Hom } \mathcal{C}(A, B)$ 。

(iii) この集合の元を A から B への射 (morphism または arrow) という。

(iiii) 任意の $A, B, C \in \text{Ob } \mathcal{C}$ に対し定められた写像

$$\text{Hom } \mathcal{C}(B, C) \times \text{Hom } \mathcal{C}(A, B) \rightarrow \text{Hom } \mathcal{C}(A, C).$$

この写像を合成 (composition) という。

射 $g \in \text{Hom } \mathcal{C}(A, B)$ と $f \in \text{Hom } \mathcal{C}(B, C)$ の合成を gf または $g \circ f$ とあら

わす。

条件 (a) 合成は結合的、すなわち、任意の射 $f: A \rightarrow B, g: B \rightarrow C, h: C \rightarrow D$ に対し、

$$\text{等式 } h(gf) = (hg)f \text{ が成り立つ。}$$

(b) 各対象 $A \in \text{Ob } \mathcal{C}$ に対し、次のみたす射 $1_A: A \rightarrow A$ が存在する。

『任意の $f: A \rightarrow B$ に対し $f \circ 1_A = f$ 。』

任意の $g: C \rightarrow A$ に対し $1_A \circ g = g$ 。』

条件 (b) の射 $1_A \in \text{Hom } \mathcal{C}(A, A)$ は各 A に対し一意的に定まることがわかる。これを A の恒等射 (identity morphism) という。

$f \in \text{Hom } \mathcal{C}(A, B)$ に対し、 A を f の domain または source, B を f の codomain または target とよぶ。

exercise 3. 条件 (b) の射 $1_A \in \text{Hom } \mathcal{C}(A, A)$ は各 A に対し一意的に定まることがわかる。

画法上の注意を少し。

・ f を $A \rightarrow B$ と書く。 $g: B \rightarrow C$ の合成を図式 $A \xrightarrow{f} B \xrightarrow{g} C$ であらわす。

・ $\text{Hom } \mathcal{C}(A, B)$ を $\text{Hom}(A, B)$ と書くこともある。

・ $\text{Hom } \mathcal{C}(A, B)$ と $\text{Hom}(A, B)$ と書くこともある。

・ $\text{Hom } \mathcal{C}(A, B)$ と $\text{Hom}(A, B)$ と書くこともある。

・ $\text{Hom } \mathcal{C}(A, B)$ と $\text{Hom}(A, B)$ と書くこともある。

・ $\text{Hom } \mathcal{C}(A, B)$ と $\text{Hom}(A, B)$ と書くこともある。

・ $\text{Hom } \mathcal{C}(A, B)$ と $\text{Hom}(A, B)$ と書くこともある。

・ $\text{Hom } \mathcal{C}(A, B)$ と $\text{Hom}(A, B)$ と書くこともある。

・ $\text{Hom } \mathcal{C}(A, B)$ と $\text{Hom}(A, B)$ と書くこともある。

・ $\text{Hom } \mathcal{C}(A, B)$ と $\text{Hom}(A, B)$ と書くこともある。

・ $\text{Hom } \mathcal{C}(A, B)$ と $\text{Hom}(A, B)$ と書くこともある。

・ $\text{Hom } \mathcal{C}(A, B)$ と $\text{Hom}(A, B)$ と書くこともある。

・ $\text{Hom } \mathcal{C}(A, B)$ と $\text{Hom}(A, B)$ と書くこともある。

・ $\text{Hom } \mathcal{C}(A, B)$ と $\text{Hom}(A, B)$ と書くこともある。

・ $\text{Hom } \mathcal{C}(A, B)$ と $\text{Hom}(A, B)$ と書くこともある。

・ $\text{Hom } \mathcal{C}(A, B)$ と $\text{Hom}(A, B)$ と書くこともある。

・ $\text{Hom } \mathcal{C}(A, B)$ と $\text{Hom}(A, B)$ と書くこともある。

・ $\text{Hom } \mathcal{C}(A, B)$ と $\text{Hom}(A, B)$ と書くこともある。

・ $\text{Hom } \mathcal{C}(A, B)$ と $\text{Hom}(A, B)$ と書くこともある。

・ $\text{Hom } \mathcal{C}(A, B)$ と $\text{Hom}(A, B)$ と書くこともある。

$(a, b), (c, d) \in \mathbb{H}^2$ に対し, 和, 積を

$$\begin{aligned}(a, b) + (c, d) &= (a + c, b + d) \\ (a, b)(c, d) &= (ac - \bar{d}b, da + b\bar{c})\end{aligned}$$

で定める. この積は可換ではなく, 結合法則もみたさないが, この積により \mathbb{H}^2 は \mathbb{R} 代数となる. さらに, 積に関する単位元 $(1, 0)$ を持ち, 0 でない元は積に関する逆元を持つ. また (結合法則をみたさないので, 逆元を持つことから直ちに言えるわけではない)⁵ 可除代数であることが示せる.

$\mathbb{H}^2 \cong \mathbb{R}^8$ にこの和, 積を入れたものを **Cayley 代数** といって \mathbb{O} で表す. \mathbb{O} の元を八元数 (**octonion**) あるいは Cayley 数という

実可除代数の例として $1, 2, 4, 8$ 次元のもの $\mathbb{R}, \mathbb{C}, \mathbb{H}, \mathbb{O}$ を挙げた. 実は次が成り立つ.

Theorem 1.3.3 ([1], [3]). A が有限次元実可除代数ならば, A の次元は $1, 2, 4, 8$ のいずれかである.

この定理は次のホモトピー論の定理の系として得られた.

Theorem 1.3.4 ([1], [3]). 奇写像

$$S^{n-1} \times S^{n-1} \rightarrow S^{n-1}$$

が存在するのは $n = 1, 2, 4, 8$ に限る. ただし, 連続写像 $f: S^{n-1} \times S^{n-1} \rightarrow S^{n-1}$ が奇写像であるとは, 任意の $x, y \in S^{n-1}$ に対し

$$f(-x, y) = -f(x, y) = f(x, -y)$$

が成り立つことをいう.

この講義でこの定理の証明を与えることは出来ないが, Theorem 1.3.4 を仮定して Theorem 1.3.3 を示しておこう.

Lemma 1.3.5. 可除代数は零因子をもたない. つまり, $a \cdot b = 0$ ならば $a = 0$ または $b = 0$.

Proof. A を可除代数, $a, b \in A, ab = 0$ とする. $a \neq 0$ とすると,

$$a \cdot b = 0 = a \cdot 0$$

で, A は可除なので $b = 0$. □

Remark . A が有限次元ならば逆も成り立つことが知られている. つまり, A が有限次元代数で, 零因子をもたなければ, A は可除代数である (証明はさほど難しいくない) . .

1.4 図

11

線写像

$A \cong \mathbb{R}^n$ を一つとすると, \mathbb{R}^n が実可除代数 (となる積が存在する) であるとしてもよい. $x, y \in \mathbb{R}^n, x \neq 0, y \neq 0$ ならば $x \cdot y \neq 0$ なので, 積を $S^{n-1} \times S^{n-1}$ に制限したものは連続写像

$$g: S^{n-1} \times S^{n-1} \rightarrow \mathbb{R}^n \setminus \{0\}$$

を与える. 写像 g と連続写像

$$\pi: \mathbb{R}^n \setminus \{0\} \rightarrow S^{n-1}, \quad \pi(x) = \frac{\|x\|}{x}$$

の合成

$$f = \pi \circ g: S^{n-1} \times S^{n-1} \rightarrow \mathbb{R}^n \setminus \{0\}, S^{n-1}$$

を考える.

$$\begin{aligned}g(x, y) \cdot \beta &= (-x) \cdot \beta = -\beta(x, y) \\ g(x, y) \cdot \beta &= (y \cdot (-x)) \cdot \beta = (y \cdot (-) \cdot \beta)(x, y) \\ g(x, y) \cdot \beta &= (y \cdot (-) \cdot \beta)(x, y) = \pi(-g(x, y)) \\ g(x, y) \cdot \beta &= \pi(-g(x, y)) = \pi(-g(x, y)) \\ g(x, y) \cdot \beta &= \pi(-g(x, y)) = \pi(-g(x, y)) \\ g(x, y) \cdot \beta &= \pi(-g(x, y)) = \pi(-g(x, y))\end{aligned}$$

ゆえ

$$\begin{aligned}f(x, y) &= \pi(-g(x, y)) = \pi(-g(x, y)) \\ f(x, y) &= \pi(-g(x, y)) = \pi(-g(x, y)) \\ f(x, y) &= \pi(-g(x, y)) = \pi(-g(x, y)) \\ f(x, y) &= \pi(-g(x, y)) = \pi(-g(x, y))\end{aligned}$$

であるから f は奇写像である. よって Theorem 1.3.4 より $n = 1, 2, 4, 8$. □

1.4 図

*4. 積が双線型 (bilinear) であるということ.

二つの空間がホモトピー一同値であることを示すのは (出来るかどうかわからない) 実際にはホモトピー同値写像を与えればよい. が, どう頑張ってもホモトピー同値写像が見つからないからといってホモトピー同値ではないというわけにはいかない. ホモトピー同値でないことを示すには不変量という考え方が有効である.

第 2 章

ホモトピー

2.1 ホモトピー

第 1 章で述べたホモトピーの性質を証明しよう.

Proposition 1.1.3. X から Y への連続写像全体のなす集合を $F(X, Y)$ と書く. ホモトピックであるという関係「 \simeq 」は $F(X, Y)$ 上の同値関係である.

Proof. 1. $f: X \rightarrow Y$ に対し, $F: X \times I \rightarrow Y$ を $F(x, t) = f(x)$ で定めると *6 明らかに連続で $F(x, 0) = F(x, 1) = f(x)$ だから $f \simeq f$.

2. $f \simeq g$ とし, $H: X \times I \rightarrow Y$ を f から g へのホモトピーとする. $H^{-1}: X \times I \rightarrow Y$ を $H^{-1}(x, t) = H(x, 1 - t)$ で定めると *7 明らかに連続で $H^{-1}(x, 0) = H(x, 1) = g(x)$, $H^{-1}(x, 1) = H(x, 0) = f(x)$ だから H^{-1} は g から f へのホモトピー. よって $g \simeq f$.

3. $f \simeq g, g \simeq h$ とし, F を f から g への, G を g から h へのホモトピーとする. $H: X \times I \rightarrow Y$ を

$$H(x, t) = \begin{cases} F(x, 2t), & 0 \leq t \leq \frac{1}{2} \\ G(x, 2t - 1), & \frac{1}{2} \leq t \leq 1 \end{cases} \quad (2.1)$$

で定めると H は連続で, $H(x, 0) = F(x, 0) = f(x)$, $H(x, 1) = G(x, 1) = h(x)$ なので $f \simeq h$. □

exercise 4. (2.1) の H が well-defined であることと連続であることを確かめよ. (ヒント: H を $X \times [0, 1/2]$ と $X \times [1/2, 1]$ に制限したものは連続. Proposition A.4.3 参照)

Proposition 2.1.1. $f, f_0, f_1: X \rightarrow Y, g, g_0, g_1: Y \rightarrow Z$ を連続写像とする.

$$\begin{aligned}F(S^{n-1}) &= Z \\ F(*) &= 0\end{aligned}$$

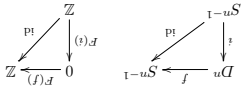
をみたすものが存在するとする (実際に存在する. この講義でも扱う予定). これを仮定すると, $Z \neq 0$ なので S^{n-1} は一点とホモトピー同値ではない. つまり S^{n-1} は可縮ではないことが分かる.

また, 連続写像 $f: D^n \hookrightarrow S^{n-1}$ で, $f|_{S^{n-1}} = \text{id}$ となるものは存在しない*5. ことごとくのようにして分かる. $?: S^{n-1} \rightarrow D^n$ を包含写像とする. $f|_{S^{n-1}} = \text{id}$ が成り立つとする.

$$f|_{S^{n-1}} = f! \text{ なので, } f! = = = \text{id} \text{ が成り立つ. よって}$$

$$\text{id}_Z = \text{id}_{F(S^{n-1})} = F(\text{id}_{S^{n-1}}) = F(f!) = F(f)F(t)$$

となる. D^n は可縮なので $F(D^n) = F(*) = 0$ ゆえ右辺は 0 写像となり不合理.



*5. これは Brouwer の不動点定理と同値な命題である.

$O_i := \pi(U_i - A) \subset X/A$ とおく. $x_i \in U_i - A$ であるから, $[x_i] \in O_i$ である. また,

$$\pi^{-1}(O_i) = \pi^{-1}(\pi(U_i - A)) = U_i - A$$

である (なぜか?). から, O_i は X/A の開集合である. π は全射で,

$$\pi^{-1}(O_1 \cap O_2) = \pi^{-1}(O_1) \cap \pi^{-1}(O_2) = (U_1 - A) \cap (U_2 - A) = \emptyset$$

ゆえ $O_1 \cap O_2 = \emptyset$.

$x_1 \notin A, x_2 \in A$ のとき, このとき $[x_2] = [A] = *$. $x := x_1$ とする. 各 $a \in A$ に対し,

$x \neq a$ ので, $x \in U_a, U_a \cap V_a = \emptyset$ となる開集合 U_a, V_a が存在する. A はコンパクトだから, ある $a_1, \dots, a_n \in A$ が存在し, $A \subset \bigcup_{i=1}^n V_{a_i}$ となる.

$$U := \bigcup_{i=1}^n U_{a_i}, \quad V := \bigcup_{i=1}^n V_{a_i}$$

とおくと, U, V は開集合で, $x \in U, A \subset V, U \cap V = \emptyset$ となる. $\pi(U), \pi(V) \subset X/A$ を考

えと

$$\pi^{-1}(\pi(U)) = U, \quad \pi^{-1}(\pi(V)) = V$$

だから開集合で, $[x] \in \pi(U), * \in \pi(V), \pi(U) \cap \pi(V) = \emptyset$ であることが分かる.

コンパクト Hausdorff 空間の開部分集合はコンパクトであることから後半が分かる. □

exercise 7. $\pi: X \rightarrow X/A$ を自然な射影とする. $B \subset X$ に対し,

$$\pi^{-1}(\pi(B)) = \begin{cases} A \cup B, & A \cap B \neq \emptyset \\ B, & A \cap B = \emptyset \end{cases}$$

Remark. 一般に, X が Hausdorff 空間であっても, その商空間は Hausdorff とは限らない. X がコンパクト Hausdorff 空間のときに, 商空間が Hausdorff となるための必要十分条件が A.9.6 にある.

Definition 3.1.4. $(X, x_0), (Y, y_0)$ を基点付き空間とする.

1.

$$X \preceq I := X \times I / x_0 \times I$$

2.

$$CX := X \times I / X \times 0 \cup x_0 \times I$$

3.

$$\Sigma X := X \times I / X \times 0 \cup x_0 \times I \cup X \times 1$$

な (基点付き) 連続写像 \bar{f} を誘導する:

$$\begin{array}{ccc} X & & X/A \\ \xleftarrow{f} & & \xleftarrow{f} \\ \uparrow d & & \uparrow d \\ Y & & Y/B \end{array}$$

ただし p, q は自然な射影.

さらに, $f: (X, A) \rightarrow (Y, B)$ が空間対の同相写像ならば, $\bar{f}: X/A \rightarrow Y/B$ は (基点付き) 同相写像である.

Proof. $f(A) \subset B$ であるから, $a, a' \in A$ ならば $f(a), f(a') \in B$. よって Corollary A.2.5

より, 図式を可換にするような写像 \bar{f} がただ一つ存在する.

f, g はともに連続なので, Theorem A.6.5 より, f は連続である.

$f: (X, A) \rightarrow (Y, B)$ が空間対の同相写像ならば, $g: (Y, B) \rightarrow (X, A)$ で $gf = \text{id}_X$,

$fg = \text{id}_Y$ をみたすものが存在し, 次の可換図式を得る:

$$\begin{array}{ccc} X/A & \xleftarrow{f} & Y/B \\ \uparrow d & & \uparrow d \\ X & \xleftarrow{g} & Y \end{array}$$

ゆえ, 一意性 (Corollary A.2.5) より, $gf = \text{id}_{X/A}$. 同様に $\bar{f}\bar{g} = \text{id}_{Y/B}$ が分かる. □

Lemma という程のものではないが

Lemma 3.1.2. $f: (X, A) \rightarrow (Y, B)$ を空間対の写像とする. このとき, $\bar{f}: X/A \rightarrow Y/B$

が全単射 $\Leftrightarrow f(X - A) \subset (Y - B)$ かつ $f: X - A \rightarrow Y - B$ が全単射.

Proposition 3.1.3. X を Hausdorff 空間, $A \subset X$ をコンパクト部分空間とする. この

とき, X/A も Hausdorff 空間である.

特に, X がコンパクト Hausdorff 空間で, $A \subset X$ が閉部分集合ならば, X/A は

Proof. $x_1, x_2 \in X, [x_1] \neq [x_2] \in X/A$ とする. $x_1, x_2 \notin A$ のとき, このとき $x_1 \neq x_2$

である. X は Hausdorff なので, $x_1 \in U_1, x_2 \in U_2, U_1 \cap U_2 = \emptyset$ となる X の開集合

U_1, U_2 が存在する. A は Hausdorff 空間のコンパクト部分集合なので閉集合である. よっ

を与える. 容易に

$$q(S^{n-1} \times I - S^{n-1} \times 0 \cup e \times I) \subset D^n - e$$

であり,

$$q: S^{n-1} \times I - S^{n-1} \times 0 \cup e \times I \rightarrow D^n - e$$

が全単射であることが分かる. よって

$$\bar{q}: CS^{n-1} \rightarrow D^n$$

は連続な全単射. CS^{n-1} はコンパクト, D^n は Hausdorff だから, \bar{q} は同相.

2. 写像 $q: D^n \rightarrow S^n \subset \mathbb{R} \times \mathbb{R}^n$ を $q(x) = (2|x|^2 - 1, \sqrt{1 - |x|^2}x)$ で定める. 明らかに q は連続で, $q(x) \in S^n$ であることが分かる. さらに, $x \in S^{n-1}$, すなわち $|x| = 1$ ならば, $q(x) = e, x \notin S^{n-1}$, すなわち $|x| < 1$ ならば, $q(x) \neq e$ であるから, q は空間対の写像 $(D^n, S^{n-1}) \rightarrow (S^n, e)$ であり, $q(D^n - S^{n-1}) \subset S^n - e$ である.

写像 $f: S^{n-1} - e \rightarrow D^n - S^{n-1}$ を

$$f(r, x) = \frac{x}{\sqrt{2(1-r)}}$$

で定めると, f は $q|_{D^n - S^{n-1}}$ の逆写像であり, $q: D^n - S^{n-1} \rightarrow S^n - e$ が全単射であることが分かる.

よって,

$$\bar{q}: D^n/S^{n-1} \rightarrow S^n/e = S^n$$

は全単射基点付き写像. D^n/S^{n-1} はコンパクト, $S^n - 1$ は Hausdorff なので, \bar{q} は同相.

3. 1.2 及び $CX/X \cong \Sigma X$ であることより

$$S^n \cong D^n/S^{n-1} \cong CS^{n-1}/S^{n-1} \cong \Sigma S^{n-1}.$$

□

Definition 3.2.3. n 次元ユークリッド空間 \mathbb{R}^n の部分空間

$$I^n := \{(x_1, \dots, x_n) \in \mathbb{R}^n \mid 0 \leq x_i \leq 1\}$$

$$\partial I^n := \{(x_1, \dots, x_n) \in I^n \mid \exists i: x_i \in \{0, 1\}\}$$

をそれぞれ n 次元キューブ (n -dimensional cube) とその境界という.

$n \geq 1$ に対し,

$$J^n := \partial I^n \times I \cup I^n \times 0 \subset \partial I^{n+1} \subset I^n \times I$$

の逆写像とすると, f が同相写像なので g は連続である. $f|_A: A \rightarrow B$ は同相写像なので全射ゆえ $f(A) = B$ である. $b \in B$ に対し, $f(g(b)) = b \in B = f(A)$. f は単射だから $g(b) \in A$. よって $g(B) \subset A$. したがって g は空間対の写像であり, 明らかに $f: (X, A) \rightarrow (Y, B)$ の逆射. □

exercise 6. $f: (X, A) \rightarrow (Y, B)$ を空間対の写像とする. このとき, $f|_A: A \rightarrow B$ が連続であることを示せ (Proposition A.4.2 を見よ).

Definition 2.1.4. 空間対 (X, A) に対し, 空間対 $(X \times I, A \times I)$ を $(X, A) \times I$ と表す. $f, g: (X, A) \rightarrow (Y, B)$ を空間対の写像とする. 空間対の写像

$$H: (X, A) \times I \rightarrow (Y, B)$$

で, 任意の $x \in X$ に対し

$$H(x, 0) = f(x)$$

$$H(x, 1) = g(x)$$

をみたすものが存在するとき, f と g はホモトピック (homotopic) であるといい, $f \simeq g$ と書く. また, H を f から g へのホモトピー (homotopy) という.

基点付き写像 $f, g: (X, x_0) \rightarrow (Y, y_0)$ がホモトピックであるとき基点を止めてホモトピックであるということがある. また, このときのホモトピーを基点付きホモトピーとよぶことがある.

定義より

$$H: (X, x_0) \times I \rightarrow (Y, y_0)$$

が f から g への基点付きホモトピーであるということは

$$H: X \times I \rightarrow Y$$

が連続で, 任意の $x \in X$ と $t \in I$ に対し

$$H(x_0, t) = y_0$$

$$H(x, 0) = f(x)$$

$$H(x, 1) = g(x)$$

をみたすということ. つまり, H は f から g への (基点を考えない普通の) ホモトピーであって, 任意の $t \in I$ に対し $H(x_0, t) = y_0$ をみたすもの (基点を動かさない) ということ.

Proposition 3.1.1. 空間対の写像 $f: (X, A) \rightarrow (Y, B)$ は、次の図式が可換となるよう

$$\begin{array}{ccc} X/A \cong (X-A) \amalg \{*\} & & \\ \uparrow & \uparrow \text{id} & \uparrow \pi \\ X = (X-A) \amalg A & & \end{array}$$

$\pi(A) = *$ である。

であり、この対応のもと、射影 $\pi: X \rightarrow X/A$ を $X-A$ に制限したものは恒等写像で、

$$X/A \cong (X-A) \amalg \{A\} \cong (X-A) \amalg \{*\}$$

Remark. 集合として

X/A は、一点に潰した点 $[A]$ を基点として基点付き空間と考える。

と定める。

$$X/\emptyset = X \amalg *$$

$A = \emptyset$ のときは、 X/\emptyset を、 X に一点を付け加えた空間 (X と一点の直和)

(Definition A.6.3) .

という同値関係による商空間を部分空間 A を一点に縮めた空間といい、 X/A と書く

$$x \sim y \Leftrightarrow x = y \text{ または } x, y \in A$$

X を位相空間、 $A \subset X$ を空でない部分空間とする。

3.1 部分空間を一点に縮めた空間

基本的な空間及び構成

第 3 章

□

$$\begin{array}{ccc} X \times Y/X \times B \cup A \times Y & \xrightarrow{\quad} & X/A \vee Y/B \\ \uparrow & & \uparrow \\ X \times Y & \xrightarrow{\quad} & X/A \times Y/B \end{array}$$

Proof. 次の図式を考える。

ちとしては $(X, A) \vee (Y, B) \cong X/A \vee Y/B$.

Remark. $(X, A) \vee (Y, B)$ という記号はあまり使わない (本当?) 気がするけれど、気持

$$X \times Y/X \times B \cup A \times Y \cong X/A \vee Y/B$$

間では、 A, B が閉集合ならば次は同相:

Proposition 3.1.7. $(X, A), (Y, B)$ を空間対とする。 X, Y がコンパクト Hausdorff 空

$$(X, A) \times (Y, B) := (X \times Y, X \times B \cup A \times Y)$$

$(X, A) \times (Y, B)$ と書く:

Notation 3.1.6. 空間対 $(X, A), (Y, B)$ に対し、空間対 $(X \times Y, X \times B \cup A \times Y)$ を

を誘導する。

$$\begin{array}{l} f_1 \vee f_2: X_1 \vee X_2 \rightarrow Y_1 \vee Y_2 \\ f_1 \vee f_2: X_1 \vee X_2 \rightarrow Y_1 \vee Y_2 \end{array}$$

は、基点付き写像

Proposition 3.1.5. X_1, X_2, Y_1, Y_2 を基点付き空間とする。基点付き写像 $f_i: X_i \rightarrow Y_i$

Proposition 3.1.1 より次が分かる。

ある (もっと弱い条件で O.K.) .

$(X \vee Y) \vee Z \cong X \vee (Y \vee Z)$ は同相とは限らない。 X, Y, Z がコンパクトならば同相で

Remark. $X \vee Y \cong Y \vee X$ (同相) である。

$$X \vee Y := X \times Y/X \times y_0 \cup x_0 \times Y = X \times Y/X \vee Y$$

5.

$$X \vee Y := X \amalg Y/x_0 \cup y_0$$

4.

3.2 球面, キューブ

円盤と球面の定義を再掲する。

Definition 3.2.1. n 次元ユークリッド空間 \mathbb{R}^n の部分空間

$$\begin{aligned} D^n &:= \{x \in \mathbb{R}^n \mid \|x\| \leq 1\} \\ &= \left\{x = (x_1, \dots, x_n) \in \mathbb{R}^n \mid \sum_{i=1}^n x_i^2 \leq 1\right\} \\ S^{n-1} &:= \{x \in \mathbb{R}^n \mid \|x\| = 1\} \\ &= \left\{x = (x_1, \dots, x_n) \in \mathbb{R}^n \mid \sum_{i=1}^n x_i^2 = 1\right\} \end{aligned}$$

をそれぞれ n 次元円盤 (n -dimensional disc), $n-1$ 次元球面 ($n-1$ -dimensional sphere) という。

S^{n-1} と D^n は $e = (1, 0, \dots, 0) \in S^{n-1} \subset D^n$ を基点として、基点付き空間と考える。

- Lemma 3.2.2.** 1. $(D^n, S^{n-1}) \cong (CS^{n-1}, S^{n-1})$ (空間対の同相) .
2. $D^n/S^{n-1} \cong S^n$ (基点付き同相) .
3. $S^n \cong \Sigma S^{n-1}$ (基点付き同相) .

Proof. 1.

$$CS^{n-1} = S^{n-1} \times I/S^{n-1} \times 0 \cup e \times I$$

であった。写像 $q: S^{n-1} \times I \rightarrow D^n$ を $q(x, t) = tx + (1-t)e$ で定める。

$$\begin{aligned} |tx + (1-t)e| &\leq t|x| + (1-t)|e| \\ &\leq t + (1-t) = 1 \end{aligned}$$

ゆえ $q(x, t) \in D^n$ だから q は well defined. 明らかに連続で、

$$q(x, 0) = e, \quad q(e, t) = e$$

ゆえ、 q は空間対の写像

$$q: (S^{n-1} \times I, S^{n-1} \times 0 \cup e \times I) \rightarrow (D^n, e)$$

を与え、

$$\bar{q}: CS^{n-1} = S^{n-1} \times I/S^{n-1} \times 0 \cup e \times I \rightarrow D^n/e = D^n$$

を定める。さらに $q(x, 1) = x$ なので、 \bar{q} は空間対の写像

$$\bar{q}: (CS^{n-1}, S^{n-1}) \rightarrow (D^n, S^{n-1})$$

空間対のホモトピーについても Proposition 1.1.3, Proposition 2.1.1 と同様なことが成り立つ。証明も同じである (何箇所かで空間対の写像になっていることをチェックすればよい) .

- Definition 2.1.5.** 1. 空間対 $(X, A), (Y, B)$ に対し、 (X, A) から (Y, B) への空間対の写像全体のなす集合を $F((X, A), (Y, B))$ で表す。基点付き空間の場合、 $F((X, x_0), (Y, y_0))$ を $F_*(X, Y)$ と書く。
2. (X, A) から (Y, B) への空間対の写像のホモトピー類全体のなす集合を $[(X, A), (Y, B)]$ で表す:

$$[(X, A), (Y, B)] := F((X, A), (Y, B))/\sim$$

基点付き空間の場合、 $[(X, x_0), (Y, y_0)]$ を $[X, Y]_*$ と書く。

以上のことは、部分空間の個数が増えても同様なことを考えることができる。

Definition 2.1.6. 空間の 3 対, 基点付き空間対

- 位相空間 X とその部分空間 $A_2 \subset A_1 \subset X$ の組 (X, A_1, A_2) を位相空間の 3 対という。
 A_2 が一点 $\{x_0\}$ であるときは、 $(X, A, \{x_0\})$ を (X, A, x_0) と書き、基点付き空間対という。このとき $x_0 \in A \subset X$ である。また x_0 を基点 (basepoint) という。
- $(X, A_1, A_2), (Y, B_1, B_2)$ を空間の 3 対とする。連続写像 $f: X \rightarrow Y$ は、 $i = 1, 2$ に対し $f(A_i) \subset B_i$ をみたすとき空間の 3 対の写像とよび、 $f: (X, A_1, A_2) \rightarrow (Y, B_1, B_2)$ と表す。
基点付き空間対の写像 $f: (X, A, x_0) \rightarrow (Y, B, y_0)$, つまり連続写像 $f: X \rightarrow Y$ で、 $f(A) \subset B, f(x_0) = y_0$ をみたすものを基点付き写像 (based map) という。
- 位相空間の 3 対を対象とし、空間の 3 対の写像を射とする圏を空間の 3 対の圏といい (**Top(3)**) と書く。 (**Top(3)**) の同型射を空間の 3 対の同相写像という。
- 空間の 3 対 (X, A_1, A_2) から (Y, B_1, B_2) への 3 対の写像全体のなす集合を $F((X, A_1, A_2), (Y, B_1, B_2))$ で表し、そのホモトピー類全体を $[(X, A_1, A_2), (Y, B_1, B_2)]$ と書く。
- 基点付き空間対 (X, A, x_0) から (Y, B, y_0) への基点付き写像全体のなす集合を $F_*, ((X, A), (Y, B))$ で表し、そのホモトピー類全体を $[(X, A), (Y, B)]_*$ と書く。

*6 射影 $X \times I \rightarrow X$ と f の合成だから

*7 $\iota: I \rightarrow I, \iota(t) = 1-t$ は連続で、 $H^{-1} = H \circ (\text{id}_X \times \iota)$

このとき φ, ψ は全射で互いに他の逆.

$$\mathrm{F}(X \times Y, Z) \overset{\psi}{\underset{\varphi}{\rightleftarrows}} \mathrm{F}(X, \mathrm{F}(Y, Z))$$

Corollary 3.4.10. Y をコンパクト Hausdorff 空間とする.

1. $f_0 \simeq f_1: X \times Y \rightarrow Z$ ならば, $f_0^\vee \simeq f_1^\vee: X \rightarrow \mathrm{F}(Y, Z)$.
2. $g_0 \simeq g_1: X \rightarrow \mathrm{F}(Y, Z)$ ならば, $g_0^\vee \simeq g_1^\vee: X \times Y \rightarrow Y$.
3. φ, ψ は全射

Proof. 1. $H: X \times Y \times I \rightarrow Z$ をホモトピーとする. $H^\vee: X \times I \rightarrow \mathrm{F}(Y, Z)$ は連続で,

$$H^\vee(x, t)(y) = H(x, y, t) = f_t(x, y) = f_t^\vee(x)(y)$$

なので f_0^\vee から f_1^\vee へのホモトピーを与える.

2. $G: X \times I \rightarrow \mathrm{F}(Y, Z)$ をホモトピーとする. $G^\vee: X \times Y \times I \rightarrow Z$ は連続で,

$$G^\vee(x, y, t) = G(x, t)(y) = g_t(x)(y) = g_t^\vee(x, y)$$

なので g_0^\vee から g_1^\vee へのホモトピーを与える.

3. 1より φ は $\varphi: [X \times Y, Z] \rightarrow [X, \mathrm{F}(Y, Z)]$ を誘導し, 2より ψ は $\psi: [X, \mathrm{F}(Y, Z)] \rightarrow [X \times Y, Z]$ を誘導する. 明らかに互いに他の逆.

□

φ と ψ の連続性にはもう少し条件が必要.

Theorem 3.4.11. X, Y をコンパクト Hausdorff 空間とする.

このとき φ, ψ は同相写像で互いに他の逆.

$$\mathrm{F}(X \times Y, Z) \overset{\psi}{\underset{\varphi}{\rightleftarrows}} \mathrm{F}(X, \mathrm{F}(Y, Z))$$

3.4.2 基点付きの場合

次に基点付きの場合を考える.

Proposition 3.4.5. $f: X \times Y \rightarrow Z$ を連続写像とする. このとき, f の隣接写像

(adjoint map)

$$f^\vee: X \rightarrow \mathrm{F}(Y, Z), \quad f^\vee(x)(y) = f(x, y)$$

は連続である.

従って次の写像を定義することができる.

Definition 3.4.6. 写像

$$\varphi: \mathrm{F}(X \times Y, Z) \rightarrow \mathrm{F}(X, \mathrm{F}(Y, Z))$$

を $\varphi(f) = f^\vee$ により定める.

φ は一般に連続とは限らない. 全射とも限らない. 連続であるとか, 全射であるためには, 写像空間のノース ($\mathrm{F}(X, Y)$ の X) に何らかの仮定が必要である. 以下では, ノースがコンパクト Hausdorff であるという仮定をおいている. この仮定が不要なものもあるし, いずれもより弱い仮定でも成り立つが, 煩雑になるので, ここでは少し強い仮定をおくことにした.

Remark. この様に何らかの仮定が必要であるというのは色々不便である. うまいとやる枠組みがある (コンパクト生成弱 Hausdorff 空間 (compactly generated weakly Hausdorff spaces) 等).

Proposition 3.4.7. X をコンパクト Hausdorff 空間とする. このとき隣写像 (evaluation map)

$$ev: \mathrm{F}(X, Y) \times X \rightarrow Y, \quad ev(f, x) = f(x)$$

は連続である.

Definition 3.4.8. Y をコンパクト Hausdorff 空間とする. このとき, 連続写像 $g: X \rightarrow \mathrm{F}(Y, Z)$ に対し, 写像

$$g^\vee := ev \circ (g \times \mathrm{id}): X \times Y \xrightarrow{g \times \mathrm{id}} \mathrm{F}(Y, Z) \times Y \xrightarrow{ev} Z, \quad g^\vee(x, y) = (g(x))(y)$$

は連続である (g^\vee も g の隣接とよぶことがある).

写像

$$\psi: \mathrm{F}(X, \mathrm{F}(Y, Z)) \rightarrow \mathrm{F}(X \times Y, Z)$$

を $\psi(g) = g^\vee$ により定める.

Proposition 3.4.9. Y をコンパクト Hausdorff 空間とする.

3.4.3 ループ

3.2 で以下の同相を与えた:

$$(I^k, \partial I^k) \cong (D^k, S^{k-1}) \\ S(k) = = I^k / \partial I^k \cong D^k / S^{k-1} \cong S^k$$

特に断らない限り, これらの空間の間の同相写像はこれらを使う.

Definition 3.4.19. 基点付き空間 X に対し

$$\Omega X := \mathrm{F}((I, \partial I), (X, *))$$

を X のループ空間 (loop space) という.

$$\Omega X \cong \mathrm{F}_*(S(1), X) \cong \mathrm{F}_*(S^1, X)$$

である. また

$$\Omega^k X := \mathrm{F}((I^k, \partial I^k), (X, *))$$

を k 重ループ空間 (k th loop space) という.

$$\Omega^k X \cong \mathrm{F}_*(S(k), X) \cong \mathrm{F}_*(S^k, X)$$

である.

Proposition 3.4.20. X をコンパクト Hausdorff 空間とする.

$$\mathrm{F}_*(\Sigma^k X, Y) \cong \mathrm{F}_*(X, \Omega^k Y) \\ \Omega^k \Omega^k X \cong \Omega^{k+1} X$$

Proof.

$$\begin{aligned} \mathrm{F}_*(\Sigma^k X, Y) &= \mathrm{F}_*(X \wedge S(k), Y) \\ &\cong \mathrm{F}_*(X, \mathrm{F}_*(S(k), Y)) \\ &= \mathrm{F}_*(X, \Omega^k Y). \\ \Omega^k X &\cong \mathrm{F}_*(S(1), \Omega^k X) \\ &\cong \mathrm{F}_*(\Sigma^k S(1), X) \\ &\cong \mathrm{F}_*(S(k+1), X) \\ &= \Omega^{k+1} X. \end{aligned}$$

□

と定め,

$$J^0 := \{0\} \subset I$$

と定める.

Lemma 3.2.4. 空間対として $(I^n, \partial I^n) \cong (D^n, S^{n-1})$.

Proof.

$$\tilde{I}^n := \{(x_1, \dots, x_n) \in \mathbb{R}^n \mid \forall i: -1 \leq x_i \leq 1\} \\ \partial \tilde{I}^n := \{(x_1, \dots, x_n) \in I^n \mid \exists i: x_i \in \{-1, 1\}\}$$

と定める. 明らかに写像

$$\tilde{I}^n \supset (x_1, \dots, x_n) \mapsto \left(\frac{x_1+1}{2}, \dots, \frac{x_n+1}{2} \right) \in I^n$$

により $(\tilde{I}^n, \partial \tilde{I}^n) \cong (I^n, \partial I^n)$ である.

さらに, 写像

$$\Psi: D^n \rightarrow \tilde{I}^n, \quad \Psi(x) = \begin{cases} \frac{|x|}{\max_i |x_i|} x, & x \neq 0 \\ 0, & x = 0 \end{cases}$$

が空間対の同相 $(D^n, S^{n-1}) \cong (\tilde{I}^n, \partial \tilde{I}^n)$ を与えることが示せる (詳細は 2019 年度幾何学 IV のノート Lem. 3.2.12 を参照). □

Corollary 3.2.5. $I^n / \partial I^n \cong S^n$.

Proof. $I^n / \partial I^n \cong D^n / S^{n-1} \cong S^n$. □

Notation 3.2.6.

$$S(n) := I^n / \partial I^n \\ D(n+1) := CS(n)$$

Lemma 3.2.7.

$$(D(n+1), S(n)) \cong (I^{n+1} / J^n, \partial I^{n+1} / J^n)$$

Lemma 3.2.8. 1. $S(l) \wedge S(m) \cong S(l+m)$.

$$2. \underbrace{S^1 \wedge \dots \wedge S^1}_n \cong S^n.$$

Definition 3.2.9. $\Sigma^n X := X \wedge S(n)$ を X の n 重懸垂という.

Remark. 講義では $S^n \wedge X$ と定義したが, 後の都合により, こちらに変更.

の生成する $F(X, Y)$ の位相 (これらが開集合となる最弱の位相, これらを基底とする位相) をコンパクト位相 (*compact-open topology*) という.

$F(X, Y)$ にコンパクト位相を与えたものを写像空間 (*mapping space*) と言う.

空間対の写像全体 $F((X, A), (Y, B))$, 空間の 3 対の写像全体 $F((X, A_1, A_2), (Y, B_1, B_2))$ には, $F(X, Y)$ からの相対位相を入れる.

Proposition 3.4.2. X, Y, Z を位相空間, $f: X \rightarrow Y$ を連続写像とする. 連続写像の合成は連続なので, f の誘導する写像は写像空間の間の写像を定める.

1. 写像 $f_2: F(Y, Z) \rightarrow F(Z, X) \rightarrow F(X, Y)$ を $f_2(g) = f \circ g$ で定めると, f_2 は連続である:

$$\begin{array}{ccc} F(X, Y) & \xleftarrow{f_2} & F(Z, X) \\ \wr & & \wr \\ Z \xrightarrow{g} X & \xleftarrow{f} & Z \end{array}$$

2. 写像 $f^2: F(Y, Z) \rightarrow F(X, Z)$ を $f^2(h) = h \circ f$ で定めると, f^2 は連続である.

$$\begin{array}{ccc} F(Y, Z) & \xleftarrow{f^2} & F(X, Z) \\ \wr & & \wr \\ Y \xrightarrow{f} Z & \xleftarrow{h} & X \end{array}$$

Proposition 3.4.3. 1. $(g \circ f)_2 = g_2 \circ f_2$, $\text{id}_2 = \text{id}$.

2. $(g \circ f)^2 = f^2 \circ g^2$, $\text{id}^2 = \text{id}$.

Corollary 3.4.4. f が同相写像ならば f_2, f^2 も同相写像.

これらは基点付きの場合も成り立つ.

3.4.1 随伴

(連続とは限らない) 写像全体 $\text{Map}(X, Y)$ を考えたと, 次の全単射がある.

$$\begin{array}{ccc} \text{Map}(X \times Y, Z) & \xrightleftharpoons[\varphi]{\Phi} & \text{Map}(X, \text{Map}(Y, Z)) \\ \Phi(f)(g)(x)(y) & = & f(x, y) \\ \Phi(g)(x)(y) & = & g(x)(y) \end{array}$$

$F(X, Y)$ の場合との様になるであらうか.

Proposition 3.4.12. (X, A) を空間対, (Y, B_0) を基点付き空間とする.

射影 $\pi: X \rightarrow X/A$ は連続な全単射

$$\pi^*: F_*(X/A, Y)_* \cong [F_*(X, A), (Y, B_0)]$$

を誘導する.

さらに, A がコンパクト閉集合ならば $\pi^!$ は同相写像である.

基点付き空間 X, Y に対し, $F_*(X, Y)$ は, 定値写像 $(c(x) = *)$ を基点として基点付き空間と考える.

Definition 3.4.13. X, Y, Z を基点付き空間, $\pi: X \times Y \rightarrow X \times Y / X \times * \cup * \times Y = X \vee Y$ を射影とする.

基点付き写像 $f: X \vee Y \rightarrow Z$ に対し連続写像 $(f\pi)^\wedge: X \rightarrow F(Y, Z)$ を考えたと,

$$(f\pi)^\wedge(x)(*) = f(\pi(x, *)) = f(x, *) = *$$

ゆえ $(f\pi)^\wedge(x) \in F_*(Y, Z)$ で,

$$(f\pi)^\wedge(*) = f\pi(*) = f(*) = *$$

ゆえ $(f\pi)^\wedge \in F_*(X, F_*(Y, Z))$ である.

$$\begin{array}{ccc} F_*(X \vee Y, Z) & \xrightarrow{\pi^!} & F_*(F_*(X, F_*(Y, Z)), (Z, *)) \\ \wr & & \wr \\ F_*(X, F_*(Y, Z)) & \xrightarrow{\varphi} & F_*(X \times Y, Z) \end{array}$$

写像

$$\varphi: F_*(X \vee Y, Z) \rightarrow F_*(X, F_*(Y, Z))$$

を $\varphi(f) = (f\pi)^\wedge$ により定める.

明らかに, $c: X \vee Y \rightarrow Z$ が定値写像のとき $\varphi(c)$ も定値写像であるから, φ は基点を保つ.

Proposition 3.4.14. 値写像の制限を考えると,

$$\begin{array}{l} ev(c, x) = c(x) = * \\ ev(f, *) = f(*) = * \end{array}$$

Lemma 3.2.10. 1. $\Sigma X \cong \Sigma \Sigma^! X$.

2. $\Sigma^n X \cong \Sigma \Sigma^{n-1} X$.

Proof. 1.

$$\begin{array}{l} \Sigma^! X = X \vee S(1) \\ \cong (X/*) \wedge (I/I\partial I) \\ \cong X \times I/I \times I \cup * \times I \\ = \Sigma X \end{array}$$

2.

$$\begin{array}{l} \Sigma^n X = X \vee S(n) \\ \cong X \vee S(n-1) \vee S(1) \\ \cong \Sigma^{n-1} X \vee S(1) \\ \cong \Sigma \Sigma^{n-1} X. \end{array}$$

□

以降,

$$S^n, D^n/S^{n-1}, \partial I^n, S(n), \Sigma S^{n-1}$$

の間の同相写像及び空間対の同相写像

$$(D^n, S^{n-1}) \cong (CS^{n-1}, S^{n-1}) \cong (I^n, \partial I^n) \cong (D(n), S(n-1)) \cong (I^n/J^{n-1}, \partial I^n/J^{n-1})$$

は, 特に断らなければこの節で定めた写像を考える.

3.3 射影空間

3.4 写像空間

Definition 3.4.1. X, Y を位相空間とする. X から Y への連続写像全体のなす集合を $F(X, Y)$ と書くのであった.

コンパクト部分集合 $K \subset X$ と, 開集合 $U \subset Y$ に対し, $F(X, Y)$ の部分集合 $W(K, U)$ を

$$W(K, U) := \{f \in F(X, Y) \mid f(K) \subset U\}$$

により定める.

$$\{W(K, U) \mid K \subset X: \text{コンパクト}, U \subset Y: \text{開集合}\}$$

であるから, $F_*(X, Y) \wedge X$ からの基点を保つ写像を定める. これを同じ記号 ev で表す.

$$\begin{array}{ccc} F_*(X, Y) \times X & \xrightarrow{ev} & Y \\ \pi \downarrow & \nearrow ev & \\ F_*(X, Y) \vee X & & \end{array}$$

X がコンパクト Hausdorff 空間ならば, $ev: F(X, Y) \times X \rightarrow Y$ が連続なので,

$$ev: F_*(X, Y) \wedge X \rightarrow Y$$

は連続である.

□

Definition 3.4.15. Y をコンパクト Hausdorff 空間とする.

このとき, 基点付き写像 $g: X \rightarrow F_*(Y, Z)$ に対し, 写像

$$g^\vee := ev \circ (g \wedge \text{id}): X \vee Y \xrightarrow{g \wedge \text{id}} F_*(Y, Z) \vee Y \xrightarrow{ev} Z$$

は基点付き (連続) 写像である.

写像

$$\psi: F_*(X, F_*(Y, Z)) \rightarrow F_*(X \vee Y, Z)$$

を $\psi(g) = g^\vee$ により定める.

Proposition 3.4.16. Y をコンパクト Hausdorff 空間とする.

このとき φ, ψ は全単射で互いに他の逆.

$$F_*(X \vee Y, Z) \xrightleftharpoons[\psi]{\varphi} F_*(X, F_*(Y, Z))$$

Corollary 3.4.17. Y をコンパクト Hausdorff 空間とする. φ, ψ は全単射

$$[X \vee Y, Z]_* \xrightleftharpoons[\psi]{\varphi} [X, F_*(Y, Z)]_*$$

を誘導する.

Theorem 3.4.18. X, Y をコンパクト Hausdorff 空間とする.

このとき φ, ψ は同相写像で互いに他の逆.

$$F_*(X \vee Y, Z) \xrightleftharpoons[\psi]{\varphi} F_*(X, F_*(Y, Z))$$

次節以降, 集合

$$[(I^k, \partial I^k), (X, *)] \cong [S(k), X]_* \cong [S^k, X]_*$$

を考察する.

4. 上の証明の 5 の $F+1\ G$ が $\alpha_0 * \beta_0$ から $\alpha_1 * \beta_1$ へのホモトピーであること, つまり
- $F+1\ G$ は連続
 - $(F+1\ G)(s, 0) = (\alpha_0 * \beta_0)(s)$
 - $(F+1\ G)(s, 1) = (\alpha_1 * \beta_1)(s)$
 - $(F+1\ G)(0, t) = *$
 - $(F+1\ G)(1, t) = *$
- であることを確かめよ.

Corollary 5.1.5. $\pi_1(X, *)$ は, 積を $[\alpha] * [\beta] := [\alpha * \beta]$ により定めると群となる.
単位元は $[c]$ で, $[\alpha]^{-1} = [\alpha^{-1}]$ である.

Definition 5.1.6. 上で積を定めた群 $\pi_1(X, *)$ を $(X, *)$ の基本群 (fundamental group) という.

Proposition 5.1.7. 集合 M に単位元をもつ二つの積 \cdot_1, \cdot_2 が与えられており, e_1, e_2 をそれぞれの単位元とする.

さらに, 任意の $a, b, c, d \in M$ に対し, 次の交換律

$$(a \cdot_1 b) \cdot_2 (c \cdot_1 d) = (a \cdot_2 c) \cdot_1 (b \cdot_2 d)$$

が成り立つとする.

このとき, $\cdot_1 = \cdot_2, e_1 = e_2$ であり, この積は可換, 結合的である.

Proof.

$e_2 = e_2 \cdot_2 e_2$	e_2 は \cdot_2 の単位元
$= (e_2 \cdot_1 e_1) \cdot_2 (e_1 \cdot_1 e_2)$	e_1 は \cdot_1 の単位元
$= (e_2 \cdot_2 e_1) \cdot_1 (e_1 \cdot_2 e_2)$	交換律
$= e_1 \cdot_1 e_1$	e_2 は \cdot_2 の単位元
$= e_1$	e_1 は \cdot_1 の単位元

である. $e := e_1 = e_2$ とおく.

$a, b \in M$ に対し,

$$a \cdot_2 b = (a \cdot_1 e) \cdot_2 (e \cdot_1 b) = (a \cdot_2 e) \cdot_1 (e \cdot_2 b) = a \cdot_1 b$$

ゆえ二つの積は一致する. この積を「 \cdot 」と書く.

$$a \cdot b = (e \cdot a) \cdot (b \cdot e) = (e \cdot b) \cdot (a \cdot e) = b \cdot a$$

で定める.

$$\left\{ \begin{array}{l} \beta(t_1, \dots, t_{t_1-1}, t_{t_1}, \dots, t_{t_1+t_2-1}, t_{t_1+t_2}, \dots, t_n), \quad t_1 \geq \frac{n}{2} \\ \alpha(t_1, \dots, t_{t_1-1}, t_{t_1}, \dots, t_{t_1+t_2-1}, t_{t_1+t_2}, \dots, t_n), \quad t_1 \leq \frac{n}{2} \end{array} \right. = \alpha(t_1, \dots, t_n) \beta(t_1, \dots, t_n)$$

Definition 5.1.2. $(X, *)$ を基点付き空間, $1 \leq i \leq n$ とする.
 $\alpha, \beta \in \Omega^n X = F(I^n, \partial I^n), (X, *)$ に対し, $\alpha + \beta \in \Omega^n X$ を

と約束する.

$$\pi_0(X, A, *) := \pi_0(X/A, *)$$

また

分の集合である.

ただし, $I^0 = \{0\}, \partial I^0 = \emptyset, S(0) = I^0/\partial I^0 = \{0\}$ とし, $\pi_0(X, *)$ は X の弧状連結成分である.

$$\pi_n(X, *) \cong [S^n, X]_* \cong [S^n, X]$$

を Hurewicz のホモトピー集合という.

$$\pi^{n+1}(X, A, *) := (I^{n+1}, \partial I^{n+1}, *) \rightarrow \pi^n(X, *) := (I^n, \partial I^n, *)$$

Definition 5.1.1. 基点付き空間 $(X, *)$, 基点付き空間対 $(X, A, *)$, $n \geq 0$ に対し,

5.1 ホモトピー群

ホモトピー群

第 5 章

第 4 章

Fibration と Cofibration

4.1 Cofibration

4.2 Fibration

4.3 Lebesgue の補題

4.4 Hopf fibration

4.5 Puppe 列

第 4 章

Fibration と Cofibration

4.1 Cofibration

4.2 Fibration

4.3 Lebesgue の補題

4.4 Hopf fibration

4.5 Puppe 列

5.1 ホモトピー群

□

exercise 9. 1. 上の証明の 2 の $(\alpha_1 * (\alpha_2 * \alpha_3)) \circ u = (\alpha_1 * \alpha_2) * \alpha_3$ を確かめよ.

2. 上の証明の 3 の $\alpha \circ u = \alpha * c$ を確かめよ. また, $c * \alpha \simeq \alpha$ を示せ.

3. 上の証明の 4 の $\alpha \circ H$ が $\alpha * \alpha^{-1}$ から c へのホモトピーであること, つまり

- $\alpha \circ H$ は連続
- $\alpha \circ H(s, 0) = (\alpha * \alpha^{-1})(s)$
- $\alpha \circ H(s, 1) = *$
- $\alpha \circ H(0, t) = *$
- $\alpha \circ H(1, t) = *$

であることを確かめよ.

5. $F: I^2 \rightarrow X$ を α_0 から α_1 へのホモトピー, $G: I^2 \rightarrow X$ を β_0 から β_1 へのホモトピーとすると, $F +_1 G$, すなわち

$$(F +_1 G)(s, t) = \begin{cases} F(2s, t), & s \leq \frac{1}{2} \\ G(2s - 1, t), & s \geq \frac{1}{2} \end{cases}$$

が $\alpha_0 * \beta_0$ から $\alpha_1 * \beta_1$ へのホモトピーを与える.

と定めると, $\alpha \circ H$ が $\alpha * \alpha^{-1}$ から c へのホモトピーを与える.

$(\alpha^{-1})^{-1} = \alpha$ なので, $\alpha^{-1} * \alpha = \alpha^{-1} * (\alpha^{-1})^{-1} \simeq c$.

4. $H: I^2 \rightarrow I$ を

$$H(s, t) = \begin{cases} 2s(1 - t), & s \leq \frac{1}{2} \\ 2(1 - s)(1 - t), & s \geq \frac{1}{2} \end{cases}$$

と定めると, u は連続で $u(0) = 0, u(1) = 1. \alpha \circ u = \alpha * c$.

3. $u: I \rightarrow I$ を

$$u(t) = \begin{cases} 2t, & t \leq \frac{1}{2} \\ 1, & t \geq \frac{1}{2} \end{cases}$$

と定めると, u は連続で $u(0) = 0, u(1) = 1, (\alpha_1 * (\alpha_2 * \alpha_3)) \circ u = (\alpha_1 * \alpha_2) * \alpha_3$.

2. $u: I \rightarrow I$ を

$$u(t) = \begin{cases} 2t, & t \leq \frac{1}{4} \\ t + \frac{1}{4}, & \frac{1}{4} \leq t \leq \frac{1}{2} \\ \frac{1}{2}t + \frac{1}{2}, & t \geq \frac{1}{2} \end{cases}$$

である.

Lemma 5.1.3. 1. $f: X \rightarrow Y$ を基点付き写像とすると, $f_*(\alpha + \beta) = f_*(\alpha) + f_*(\beta)$.
2. $1 \leq i < j \leq n$ とする. $\tau: I^n \rightarrow I^n$ を i 番目と j 番目の成分を入れかえる (同相)写像とすると, $\tau^*(\alpha +_j \tau^*(\beta) = \tau^*(\alpha +_i \tau^*(\beta))$.

3. $n \geq 2$ とする. $ad: \Omega^n X \rightarrow \Omega(\Omega^{n-1} X)$ を Proposition 3.4.20 で与えた同相写像とすると, $ad(\alpha +_1 \beta) = ad(\alpha) * ad(\beta)$.

exercise 8. 上の 1 ($n = 1$ の場合だけでもよい), 2 ($n = 2$ の場合だけでもよい) を確かめよ.

Proposition 5.1.4. $\alpha, \alpha_i, \beta_i \in \Omega X$ とする. 次が成り立つ. ただし, \simeq は空間対の写像としてホモトピーでいいこと.

1. 連続写像 $u: I \rightarrow I$ が $u(0) = 0, u(1) = 1$ をみたせば $\alpha \simeq \alpha \circ u$.

2. $(\alpha_1 * \alpha_2) * \alpha_3 \simeq \alpha_1 * (\alpha_2 * \alpha_3)$.

3. $\alpha * c \simeq \alpha \simeq c * \alpha$.

4. $\alpha^{-1}(t) := \alpha(1 - t)$ と定めると, $\alpha * \alpha^{-1} \simeq c \simeq \alpha^{-1} * \alpha$. ただし c は基点への定値写像.

5. $\alpha_0 \simeq \alpha_1, \beta_0 \simeq \beta_1$ ならば $\alpha_0 * \beta_0 \simeq \alpha_1 * \beta_1$.

Proof. 1. $H: I^2 \rightarrow I$ を $H(s, t) = (1 - t)s + tu(s)$ ($s \leq u(s)$) を $t: 1 - t$ に内分する点) で定めると, H は $\text{id}, u: (I, \partial I) \rightarrow (I, \partial I)$ の間のホモトピー (t がホモトピーのパラメータ) を与える. 実際,

$$\begin{aligned} H(s, 0) &= s \\ H(s, 1) &= u(s) \\ H(0, t) &= tu(0) = 0 \\ H(1, t) &= 1 - t + tu(1) \\ &= 1 - t + t = 1 \end{aligned}$$

よって $\alpha \circ H$ が $\alpha = \alpha \circ \text{id}$ と $\alpha \circ u$ の間のホモトピーを与える.

付録 A

予備知識

これまでに学んだ（かもしれない）であろう事で必要なことをまとめておく．証明がついでいていないものは幾何学序論の私の講義ノート [6] にあると思う．

A.1 像と逆像

$f\colon X\rightarrow Y$ を写像とする．
 $A\subset X, B\subset Y$ に対し，

$$f(A)\subset B\Leftrightarrow A\subset f^{-1}(B)$$

が成り立つ．また， Y の部分集合 $f_*(A)$ を

$$f_*(A)=f(A)^c$$

で定めると

$$f^{-1}(B)\subset A\Leftrightarrow B\subset f_*(A)$$

が成り立つ．実際，

$$\begin{aligned} f^{-1}(B^c)&=f^{-1}(B)^c\text{ だから} \\ &\Leftrightarrow f^{-1}(B^c)\supset A^c \\ &\Leftrightarrow B^c\supset f(A^c) \\ &\Leftrightarrow B\subset f(A^c)^c \end{aligned}$$

特に

$$f^{-1}(B)\subset f^{-1}(B)\qquad f_*(A)\subset f_*(A)$$

Corollary 5.1.9. $n\geq 2$ のとき， $\pi_n(X,*)$ は，和を $[\alpha]+[\beta]=[\alpha+_i\beta]$ により定めると（この和は i にはよらず，さらに）アーベル群となる．また，群として $\pi_n(X,*)\cong\pi_1(\Omega^{n-1}X,*)$.

Proof. τ を 1 番目と i 番目の成分を入れかえる写像とすると，全単射

$$\pi_n(X,*)\xrightarrow[\cong]{\tau^*}\pi_n(X,*)\xrightarrow[\cong]{\mathrm{ad}}\pi_1(\Omega^{n-1}X,*)$$

により $\mathrm{ad}(\tau^*([\alpha+_i\beta]))=\mathrm{ad}(\tau^*([\alpha]))*\mathrm{ad}(\tau^*([\beta]))$ となるので， $[\alpha]+_i[\beta]:=[\alpha+_i\beta]$ と定めると，これは well-defined で， $\pi_n(X,*)$ は群となり，上の全単射は群の同型である．
 $([a]+_1[b])+_i([c]+_1[d])=([a]+_1[c])+_1([b]+_i[d])$ であるから， $[\alpha]+_i[\beta]=[\alpha]+_1[\beta]$ であり，この和は可換． \square

Remark . $\tau^*([\alpha])=-[\alpha]$ であることが示せる（いずれ機会があれば示す）．

Definition 5.1.10. 群 $\pi_n(X,*)$ を $(X,*)$ の n 次元ホモトピー群 (*nth homotopy group*) という．（1 次元ホモトピー群は基本群）．

Lemma 5.1.11. 1. 基点付き写像 $f\colon (X,*)\rightarrow (Y,*)$ は，写像

$$f_*\colon \pi_n(X,*)\rightarrow \pi_n(Y,*),\quad f_*([\alpha])=[f_*(\alpha)]=[f\circ\alpha]$$

を誘導する． $n\geq 1$ のとき，これは準同型である．

2. $f\simeq g\colon (X,*)\rightarrow (Y,*)$ ならば $f_*=g_*\colon \pi_n(X,*)\rightarrow \pi_n(Y,*)$.

exercise 10. 証明せよ．（ヒント：Proposition 2.1.1 の基点付き版（認めてよい）と Lemma 5.1.3.1 を使う．）

Proposition 5.1.12. 1. $f\colon X\rightarrow Y, g\colon Y\rightarrow Z$ を基点付き写像とすると，

$$(gf)_*=g_*f_*\colon \pi_n(X,*)\xrightarrow{f_*}\pi_n(Y,*)\xrightarrow{g_*}\pi_n(Z,*)$$

2. 恒等写像 $\mathrm{id}\colon X\rightarrow X$ は恒等写像を誘導する．

$$(\mathrm{id})_*=\mathrm{id}\colon \pi_n(X,*)\rightarrow \pi_n(X,*)$$

exercise 11. （定義からほぼ明らかだけど）証明せよ．

Lemma 5.1.13. $f\colon (X,*)\rightarrow (Y,*)$ を基点付き写像とする． f の誘導する写像

$$f_*\colon \Omega^kX=F((I^k,\partial I^k),(X,*))\rightarrow F((I^k,\partial I^k),(Y,*))=\Omega^kY$$

により定める． $P(X,A)$ の元は， X の道 $I\rightarrow X$ で， $l(0)=*,l(1)\in A$ を満たすもので

$$P(X,A):=F(I,(I,\partial I,j_0),(X,A,*))$$

基点付き空間対 $(X,A,*)$ に対し，空間 $P(X,A)$ を

であることを確かめよ．

- $\alpha+_i\beta\colon I^{n+1}\rightarrow X$ は連続
- $t\in\partial I^{n+1}$ なら $(\alpha+_i\beta)(t)\in A$
- $t\in j_n^{-1}$ なら $(\alpha+_i\beta)(t)=*$

exercise 12. $\alpha+_i\beta\in F(I^{n+1},\partial I^{n+1},j_n),(X,A,*)$ であること，つまり

であつた．上の定義で $t\leq n$ というのは $n+1$ の s t ボでではない．最後の座標は別扱い．

$$j^n=(\partial I^n\times I)\cup(I^n\times\{0\})\subset I^n\times I$$

Remark .

で定める

$$(a+_i\beta)(t_1,t_2,\dots,t_{n+1})=\left\{\begin{array}{l} \beta(t_1,t_2,\dots,t_{i-1},2t_i,t_{i+1},\dots,t_{n+1}),\quad t_i\geq\frac{2}{1} \\ \alpha(t_1,t_2,\dots,t_{i-1},2t_i,t_{i+1},\dots,t_{n+1}),\quad t_i\leq\frac{2}{1} \end{array}\right.$$

を

$\alpha,\beta\in F(I^{n+1},\partial I^{n+1},j_n),(X,A,*)$ に対し， $\alpha+_i\beta\in F(I^{n+1},\partial I^{n+1},j_n),(X,A,*)$

Definition 5.1.14. $(X,A,*)$ を基点付き空間対， $1\leq i\leq n$ とする．

$$\begin{array}{ccc} \pi_n(X,*) & \xrightarrow[\mathrm{ad}]{\tau^*} & \pi_n(X,*) \\ \uparrow f_* & & \uparrow f_* \\ \pi_{n-k}(X,*) & \xrightarrow[\mathrm{ad}]{\tau^*} & \pi_{n-k}(X,*) \end{array}$$

Remark .

$$\begin{array}{ccc} \pi_n(X,*) & \xrightarrow[\mathrm{ad}]{\tau^*} & \pi_n(X,*) \\ \uparrow f_* & & \uparrow f_* \\ \pi_{n-1}(X,*) & \xrightarrow[\mathrm{ad}]{\tau^*} & \pi_{n-1}(X,*) \end{array}$$

を τ^kf と書く．このとき次は可換：

4. Theorem A.5.2 を証明せよ。

A.6 商空間

Definition A.6.1. (X, O_X) を位相空間, Y を集合, $f: X \rightarrow Y$ を写像とする. Y の部分集合族

$$O_f = \{O \subset Y \mid f^{-1}(O) \in O_X\}$$

は Y に位相を与える. この位相を f による等化位相といい, 位相空間 (Y, O_f) を f による等化空間という.

Definition A.6.2. 関係 \sim を位相空間 X 上の同値関係とする. 商集合 X/\sim に, 自然な射影 $\pi: X \rightarrow X/\sim$ による等化位相を与えたものを同値関係 \sim による商空間という.

定義により, 「 $O \subset X/\sim$ が開集合 $\Leftrightarrow \pi^{-1}(O)$ が開集合」である.

Definition A.6.3. X を位相空間, $A \subset X$ を空でない部分空間とする. $A \times A \subset X \times X$ の生成する同値関係による商空間を部分空間 A を一点に縮めた空間といい, X/A と書く.

Remark. $A \times A \subset X \times X$ の生成する同値関係とは, $A \times A$ を含む最小の同値関係 $(A \times A$ を含む同値関係全ての共通部分) .

具体的に書けば, $A \times A \cup \Delta(X)$. あるいは

$$x \sim y \Leftrightarrow x = y \text{ または } x, y \in A$$

等化位相, 商空間でよく使う/大事なのは次の性質である.

Theorem A.6.4. X, Z を位相空間, Y を集合, $f: X \rightarrow Y$ を写像とし, Y に f による等化位相を入れる. $g: Y \rightarrow Z$ を写像とする.

このとき g が連続であるための必要十分条件は $g \circ f: X \rightarrow Z$ が連続であることである.



Theorem A.6.5. X, Y を位相空間, \sim を X 上の同値関係, X/\sim を商空間, $\pi: X \rightarrow X/\sim$ を自然な射影とする.

Proposition A.4.2. X, Y を位相空間, $B \subset Y$ を部分空間, $i: B \rightarrow Y$ を包含写像とする. このとき,

$$\text{写像 } f: X \rightarrow B \text{ が連続} \Leftrightarrow \text{合成 } i \circ f: X \rightarrow Y \text{ が連続.}$$

exercise 13. 証明せよ.

Proposition A.4.3. X を位相空間, $X = F_1 \cup F_2$, F_1, F_2 は開集合とする. また, Y を位相空間, $f: X \rightarrow Y$ を写像とする. このとき, $f|_{F_1}: F_1 \rightarrow Y$ ($i = 1, 2$) が連続ならば f は連続である.

exercise 14. 証明せよ.

A.5 直積空間

Definition A.5.1. $\{(X_\lambda, O_\lambda)\}_{\lambda \in \Lambda}$ を位相空間の族とする. 直積集合 $\prod_{\lambda \in \Lambda} X_\lambda$ に, 部分集合の族

$$\left\{ \bigcap_{\lambda \in \Lambda} p_\lambda^{-1}(O) \mid O \in O_\lambda \right\}$$

が生成する位相 (この位相を直積位相) というのをいれた位相空間を, 族 $\{(X_\lambda, O_\lambda)\}_{\lambda \in \Lambda}$ の直積空間または弱位相による直積空間という. ただし $p_\lambda: \prod X_\lambda \rightarrow X_\lambda$ は標準的射影. 直積集合には普通 \times にことわらなければ直積位相をいれる.

直積位相でよく使う/大事なのは次の性質である.

Theorem A.5.2. $\{X_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda}$ を位相空間の族, $X = \prod_{\lambda \in \Lambda} X_\lambda$ を位相空間, A を位相空間とする.

1. 各 $\lambda \in \Lambda$ に対し連続写像 $f_\lambda: A \rightarrow X_\lambda$ が与えられているとする.
2. $f: A \rightarrow X$ を写像とする.

このとき連続写像 $f: A \rightarrow X$ で, 全ての λ に対し $p_\lambda \circ f = f_\lambda$ をみたすものがただひとつ存在する.

exercise 15. 1. 直積空間の位相は, 全ての $\lambda \in \Lambda$ に対し p_λ が連続となるような, 最弱の位相であることを示せ.

2. p_λ は開写像であることを示せ.
3. p_λ が閉写像とはならないような例を挙げよ.

Theorem A.8.4. コンパクト空間の連続写像による像はコンパクトである.

Remark. コンパクト集合の連続写像による逆像はコンパクトとは限らない. 例えば \mathbb{R} 上の定数関数を考えてみよ.

Theorem A.8.5. X, Y ともにコンパクトなら $X \times Y$ もコンパクト.

Remark. 無限個の直積の場合も同様なことが成り立つ (チコノフ (Tikhonov) の定理) が, こちらは選択公理が必要 (選択公理と同値) であり証明はもう少し面倒.

Theorem A.8.6. コンパクト空間の無限部分集合は集積点をもつ.

Proof. X をコンパクト空間とする. $X \neq \emptyset$ としてよい. $A \subset X$ が集積点をもたないならば A は有限集合であることを示せばよい.

任意の $x \in X$ に対し, x は A の集積点ではないので, x を含む開集合 O_x で, $(A - \{x\}) \cap O_x = \emptyset$ となるものが存在する.

$$\emptyset = (A - \{x\}) \cap O_x = A \cap \{x\}^c \cap O_x = A \cap O_x \cap \{x\}^c$$

だから

$$A \cap O_x \subset \{x\}$$

である. 各 $x \in X$ に対し, この様な O_x をとる. $\{O_x\}_{x \in X}$ は X の開被覆である. X はコンパクトなので, $x_1, \dots, x_n \in X$ で,

$$X = \bigcup_{i=1}^n O_{x_i}$$

となるものが存在する.

$$A = A \cap X$$

$$= A \cap \left(\bigcup_{i=1}^n O_{x_i} \right)$$

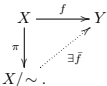
$$= \bigcup_{i=1}^n A \cap O_{x_i}$$

$$\subset \bigcup_{i=1}^n \{x_i\} = \{x_1, \dots, x_n\}$$

だから, A は有限集合. \square

Corollary A.8.7. コンパクト距離空間の任意の点列は収束する部分列を含む.

2. $f = \bar{f} \circ \pi$ となるような写像 $\bar{f}: X/\sim \rightarrow Y$ が存在する.



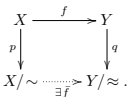
さらに, このような写像 \bar{f} は一意的である. この写像 \bar{f} を f により誘導される写像 (induced map) という.

具体的に書けば $\bar{f}(C_x) = f(x)$ である.

Corollary A.2.5. X, Y を集合, \sim, \approx をそれぞれ X, Y 上の同値関係, $p: X \rightarrow X/\sim$, $q: Y \rightarrow Y/\approx$ をそれぞれ自然な射影とする.

$f: X \rightarrow Y$ を写像とする. 次は同値である.

1. $x \sim x' \Rightarrow f(x) \approx f(x')$.
2. $q \circ f = \bar{f} \circ p$ となるような写像 $\bar{f}: X/\sim \rightarrow Y/\approx$ が存在する.



この \bar{f} は $\bar{f}(C_x) = C_{f(x)}$ により与えられる.

Proof. $q \circ f: X \rightarrow Y/\approx$ に Prop. A.2.4 を使えばよい. \square

A.3 群の作用

Definition A.3.1. X を集合, G を群とする. 写像 $\mu: X \times G \rightarrow X$ が与えられ, 次の条件をみたすとき, G は X に (μ により) 右から作用するという.

1. $\mu(\mu(x, g), h) = \mu(x, gh)$.
2. $\mu(x, e) = x$. ただし $e \in G$ は単位元.

しばしば, $\mu(x, g) \in X$ を $x \cdot g$ あるいは xg と書く. この書き方をすると上の条件は

1. $(xg)h = x(gh)$.
2. $xe = x$.

と書ける.

である。

Proof. 右作用の場合のみ示す。

- $x = x \cdot e$ ゆえ $x \sim x$.

- $x \sim y$ とする z , $x = y \cdot e = y \cdot (gg^{-1}) =$

- $(y \cdot g) \cdot g^{-1} = x \cdot g^{-1}$ ゆえ $y \sim x$.

- $x \sim y$ かつ $y \sim z$ とする z , $x = y \cdot g \cdot y = z \cdot h$ となる $g, h \in G$ がある。このとき

$$x = y \cdot g \cdot z = (z \cdot h) \cdot g = z \cdot (hg) \text{ ゆえ } x \sim z.$$

Definition A.3.5. G が X に右から作用しているとき、上の同値関係による商集合を

X/G と書き、 X を G で割った集合という。

同様に G が X に左から作用しているとき、上の同値関係による商集合を $G \backslash X$ と書き、

X を G で割った集合という。また、 $G \backslash X$ を X/G と書くことも多い。

Remark. G が X に左から作用しているとき、Lem. A.3.3 により与えられる右作用を考

えると、これらの作用の定める同値関係は同じであることが $g \cdot y = (g^{-1})^{-1} \cdot y = y \cdot g^{-1}$

より分かる。

Example A.3.6. H を G の部分群とする。群の積 $G \times H \rightarrow G$ により H は G に右から

$g \sim h$ とする $g = kh$ となる $h \in H$ がある。よって $k^{-1}g = h \in H$ 。一方、 $k^{-1}g \in H$

とすると $h = k^{-1}g$ とおけば $h \in H$ で $kh = g$ 。

A.4 部分空間

Definition A.4.1. (X, \mathcal{O}) を位相空間、 $A \subset X$ を部分集合とする。 A の部分集合族 \mathcal{O}_A

を

$$\mathcal{O}_A = \{A \cap O \mid O \in \mathcal{O}\}$$

と定めると、 \mathcal{O}_A は A の位相となる。この位相を X による A の相対位相 (relative

topology) という。

位相空間の部分集合に相対位相をいれて位相空間と見たとき、部分空間 (subspace) と

いう。

部分空間への写像の連続性を調べる際、次は有用である。

$f: X \rightarrow Y$ を写像とし、次が可換であるとする (Proposition A.2.4 参照)。



このとき、 f は連続であるための必要十分条件は f が連続であることである。

exercise 16. 1. Definition A.6.1 の \mathcal{O}_f は位相であることを示せ。

2. Definition A.6.1 で、 f による等化位相は、 f を連続にする最強の位相であることを

示せ。

3. Theorem A.6.4 を証明せよ。

4. Theorem A.6.5 を証明せよ。

A.7 ハウスドルフ空間

Definition A.7.1. 位相空間 X が Hausdorff (ハウスドルフ) 空間 である ⇔ 任意の

相異なる 2 点 $x, y \in X$ に対し、 x の近傍 U と y の近傍 V で、 $U \cap V = \emptyset$ となるものが存

在する。

exercise 17. 位相空間 X が Hausdorff 空間である ⇔ 任意の相異なる 2 点 $x, y \in X$ に

対し、 x を含む開集合 O と y を含む開集合 O' で、 $O \cap O' = \emptyset$ となるものが存在する。

Example A.7.2. 距離空間は Hausdorff 空間である。実際 X を距離空間、 $x, y \in X$,

Theorem A.7.3. Hausdorff 空間において、1 点は閉集合である。

Theorem A.7.4. Hausdorff 空間の部分空間も Hausdorff。

もう少し一般的に次が成り立つ。

Proposition A.7.5. X を位相空間、 Y を Hausdorff 空間とする。連続な射射 $f: X \rightarrow Y$

が存在すれば X も Hausdorff。

Proof. $a, b \in X$, $a \neq b$ とする。 f は射射だから $f(a) \neq f(b)$ である。 Y は Hausdorff

なので $f^{-1}(U)$, $f^{-1}(V)$ はそれぞれ a, b の近傍で、 $f^{-1}(U) \cap f^{-1}(V) = f^{-1}(U \cap V) =$

同様に、 $\nu: G \times X \rightarrow X$ が与えられ、次の条件をみたすとき、 G は X に (ν) 左から作用するという。

- $\nu(h, \nu(g, x)) = \nu(hg, x)$ 。

- $\nu(e, x) = x$ 。ただし $e \in G$ は単位元。

しばしば、 $\nu(g, x) \in X$ を $g \cdot x$ あるいは gx と書く。この書き方をすると上の条件は

- $h(gx) = (hg)x$ 。

- $ex = x$ 。

と書ける。

Lemma A.3.2. G が X に左から作用しているとする。 $g \in G$ に対し、写像 $\nu_g: X \rightarrow X$

を $\nu_g(x) = \nu(g, x) = g \cdot x$ で定める。次が成り立つ。

- $\nu_h \circ \nu_g = \nu_{hg}$ 。

- $\nu_e = 1_X$ 。

特に ν_g は全単射で、 $\nu_{g^{-1}}$ がその逆写像を与える。

Proof.

$$\nu_h(\nu_g(x)) = h \cdot (g \cdot x) = (hg) \cdot x = \nu_{hg}(x)$$

$$\nu_e(x) = e \cdot x = x = 1_X(x)$$

$$\nu_g \circ \nu_{g^{-1}} = \nu_{gg^{-1}} = \nu_e = 1_X$$

$$\nu_{g^{-1}} \circ \nu_g = \nu_{g^{-1}g} = \nu_e = 1_X$$

□

Lemma A.3.3. G が X に左から作用しているとする。 写像 $\mu: X \times G \rightarrow X$ を

$$\mu(x, g) = g^{-1} \cdot x$$

$$\mu(x, e) = e^{-1} \cdot x = e \cdot x = x$$

$$\mu(\mu(x, g), h) = h^{-1} \cdot \mu(x, g) = h^{-1} \cdot (g^{-1} \cdot x) = (h^{-1}g^{-1}) \cdot x = (gh)^{-1} \cdot x = \mu(x, gh)$$

□

Lemma A.3.4. G が X に右から (左から) 作用しているとする。 X における関係 \sim を

$$x \sim y \Leftrightarrow \exists g \in G: x = y \cdot g \text{ かつ } \exists g \in G: x = g \cdot y$$

により定めると \sim は同値関係

Theorem A.7.6. X, Y を位相空間とする。このとき $X \times Y$ が Hausdorff ⇔ X, Y ともに Hausdorff。

Remark. 無限個の直積に対しても同様なことが成り立つ。証明もほぼ同じ。

Theorem A.7.7. X を位相空間とする。このとき、 X が Hausdorff ⇔ 対角線集合

$$\Delta = \{(x, x) \mid x \in X\}$$

が $X \times X$ の閉集合。

Corollary A.7.8. X を位相空間、 Y を Hausdorff 空間、 $A \subset X$ とし、 $f, g: X \rightarrow Y$ を

連続写像とする。このとき次が成り立つ。

- X の部分集合

$$C := \{x \in X \mid f(x) = g(x)\}$$

は閉集合である。

- f と g が部分集合 A 上一致すれば、 A^a 上一致する。

Example A.7.9. \mathbb{R} を 1 次元ユークリッド空間とする。連続関数 $f, g: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}$ が \mathbb{Q} 上

一致するならば $f = g$ である。

Corollary A.7.10. X を位相空間、 Y を Hausdorff 空間とする。写像 $f: X \rightarrow Y$ が連

続ならばグラフ

$$\Gamma_f := \{(x, y) \in X \times Y \mid y = f(x)\}$$

は $X \times Y$ の閉集合。

A.8 コンパクト空間

Definition A.8.1. 1. 位相空間 X がコンパクト (compact) である ⇔ X の任意の

開被覆が有限部分被覆をもつ。

2. 位相空間 X の部分集合 A がコンパクトである ⇔ 部分空間 A がコンパクトである。

Remark. コンパクト Hausdorff 空間のことをコンパクトといい、この定義 A.8.1 の条件

をみたす空間を準コンパクト (quasi-compact) ということもある。

Proposition A.8.2. $A_1, A_2 \subset X$ がコンパクトならば $A_1 \cup A_2$ もコンパクトである。

Theorem A.8.3. コンパクト空間の閉部分集合はコンパクトである。

参考文献

[1] R. Bott and J. Milnor, On the parallelizability of the spheres, *Bull. Amer. Math. Soc.*, 64:87–89, 1958.
[2] Brayton Gray, *Homotopy Theory*, Academic Press [Harcourt Brace Jovanovich, Publishers], New York-London, 1975.
[3] Michel A. Kervaire, Non-parallelizability of the n -sphere for $n > 7$, *Proc. Natl. Acad. Sci. USA*, 44(3):280–283, 1958.
[4] J. P. May, *A Concise Course in Algebraic Topology*, Chicago Lectures in Mathematics, University of Chicago Press, Chicago, IL, 1999.
[5] Tammo tom Dieck, *Algebraic topology*, EMS Textbooks in Mathematics, European Mathematical Society (EMS), Zürich, 2008.
[6] Shinichi Tsukuda, 幾何学序論講義ノート, <http://math.u-ryukyu.ac.jp/~tsukuda/lecturenotes/>.
[7] 西田 吾郎, ホモトピー論, 共立出版, 1985.

A.9 コンパクト Hausdorff 空間 57

Proof. X をコンパクト距離空間, $\{x_n\}$ を X の点列とする. $A = \{x_n \mid n \in \mathbb{N}\}$ とおく. A が有限集合であれば, ある $x \in X$ が存在し, 無限個の番号 n に対し $x_n = x$ となるのでよい.

A が無限集合であれば, A は集積点をもつ. $x \in X$ を集積点とすると, 任意の $k \in \mathbb{N}$ に対し, $U_{\frac{1}{k}}(x) \cap A$ は無限集合であるので, $x_{n_k} \in U_{\frac{1}{k}}(x)$, $n_k < n_{k+1}$ となる数列 $\{n_k\}_k$ がとれる. 部分列 $\{x_{n_k}\}_k$ は x に収束する. \square

Remark . 逆も成り立つ. すなわち, 距離空間 X においては, X はコンパクトである \Leftrightarrow 任意の点列は収束する部分列を含む.

A.9 コンパクト Hausdorff 空間

Theorem A.9.1. Hausdorff 空間のコンパクト集合は閉集合である.

Corollary A.9.2. コンパクト Hausdorff 空間の部分集合がコンパクトであるための必要十分条件は閉集合であること.

Proof. Thm. A.8.3, A.9.1 よりあきらか. \square

Corollary A.9.3. コンパクト空間から Hausdorff 空間への連続写像は閉写像である.

Proof. Thm. A.8.3, A.8.4, A.9.1 よりあきらか. \square

Corollary A.9.4. コンパクト空間から Hausdorff 空間への連続な全単射は同相写像である. \square

Corollary A.9.5. X をコンパクト空間, Y を Hausdorff 空間, $f: X \rightarrow Y$ を連続な全射とする. X 上の同値関係 \sim を, $x \sim x' \Leftrightarrow f(x) = f(x')$ により定める. このとき, 誘導写像 $\bar{f}: X/\sim \rightarrow Y$ は同相写像である.



Proof. X はコンパクトで, 商写像 $\pi: X \rightarrow X/\sim$ は連続な全射なので, Theorem A.8.4 より, X/\sim もコンパクト.
 f が連続なので, A.6.5 より \bar{f} は連続である. $f = \bar{f} \circ \pi$ が全射なので, \bar{f} も全射. 同値関係の定め方より, あきらかに \bar{f} は単射.

また $\pi^{-1}(V) = \pi^{-1}(U) \cup U_i$

$$\pi^{-1}(V) = \pi^{-1}(U) \cup U_i$$

ゆえ,

$$\pi^{-1}(V) = \pi^{-1}(U) \cup U_i$$

$$\pi^{-1}(V) = \pi^{-1}(U) \cup U_i$$

$$\pi^{-1}(V) = \pi^{-1}(U) \cup U_i$$

よって X/\sim は Hausdorff.

□

A.10 コンパクト距離空間

Definition A.10.1. $(X, d_X), (Y, d_Y)$ を距離空間とする.

写像 $f: X \rightarrow Y$ が一様連続 (uniformly continuous) である ⇔ 任意の $\varepsilon > 0$ に対

し, ある $\delta > 0$ が存在して, $d_X(x, x') < \delta$ ならば $d_Y(f(x), f(x')) < \varepsilon$ となる.

明かに一様連続ならば連続である.

exercise 18. 一様連続ならば連続であることを示せ.

X がコンパクトのときは逆も言える.

Theorem A.10.2. (X, d_X) をコンパクト距離空間, (Y, d_Y) を距離空間とする. このと

き, 写像 $f: X \rightarrow Y$ が連続ならば, f は一様連続である.

Proof. $\varepsilon > 0$ とする.

点 $a \in X$ に対し, $f: X \rightarrow Y$ は点 a で連続なので, ある $\delta_a > 0$ が存在し, $d_X(a, x) <$

$2\delta_a$ ならば $d_Y(f(a), f(x)) < \varepsilon$ となる.

各 $a \in X$ に対し, この様な δ_a を一つとる. $\{\delta_a(a)\}_{a \in X}$ は X の開被覆で, X はコ

ンパクトなので, ある $a_1, \dots, a_n \in X$ が存在し,

$$X = \bigcup_{i=1}^n U_{\delta_i}(a_i)$$

となる. ただし見やすさのため $\delta_i = \delta_{a_i}$ とおいた.

$$\delta := \min_i \delta_i > 0$$

と, $x, x' \in U_{\delta_i}(a_i)$, すなわち $d_X(x, x') < \delta_i$ である. すると $d_Y(f(x), f(x')) < \varepsilon/2$. また

$$d_X(x, x') \leq d_X(x, a_i) + d_X(a_i, x') < \delta + \delta < 2\delta$$

すなわち, \bar{f} はコンパクト空間から Hausdorff 空間への連続な全射である. よって同相写像. □

Proposition A.9.6. X をコンパクト Hausdorff 空間, $R \subset X \times X$ を同値関係とし, $(x, y) \in R$ のとき $x \sim y$ と書く. このとき次は同値.

1. X/\sim は Hausdorff 空間.
2. R は $X \times X$ の閉集合.
3. 射影 $\pi: X \rightarrow X/\sim$ は閉写像.

Proof. 1 ⇒ 2.

$$R = (\pi \times \pi)^{-1}(\Delta_{X/\sim})$$

より分かる.

2 ⇒ 3. $F \subset X$ を閉集合とする. $\pi^{-1}(\pi(F)) \subset X$ が閉集合であることを示せばよい.

$$\begin{aligned} \pi^{-1}(\pi(F)) &= \{y \in X \mid \exists x \in F : x \sim y\} \\ &= \{y \in X \mid \exists x \in F : (x, y) \in R\} \\ &= p_2((F \times X) \cap R) \end{aligned}$$

ただし $p_2: X \times X \rightarrow X$ は射影. 仮定より, F, R は閉集合なので $(F \times X) \cap R$ は閉集合. $X \times X$ はコンパクト, X は Hausdorff なので, p_2 は閉写像 (Corollary A.9.3). よって $\pi^{-1}(\pi(F)) = p_2((F \times X) \cap R) \subset X$ は閉集合.

3 ⇒ 1. $[x_1], [x_2] \in X/\sim, [x_1] \neq [x_2]$ とする. X は Hausdorff ゆえ一点は閉集合. 仮定より射影 π は閉写像なので X/\sim でも一点は閉集合. π は連続だから $\pi^{-1}([x_1]), \pi^{-1}([x_2])$ は X の閉集合. $[x_1] \neq [x_2]$ なので $\pi^{-1}([x_1]) \cap \pi^{-1}([x_2]) = \emptyset$. X はコンパクト Hausdorff なので正規. よって

$$\pi^{-1}([x_i]) \subset U_i, \quad U_1 \cap U_2 = \emptyset$$

となる X の開集合 U_1, U_2 が存在する.

$$V_i := \pi_*(U_i) = \pi(U_i^c)^c \subset X/\sim$$

とおく. U_i は開集合だから U_i^c は閉集合. 仮定より π は閉写像なので $\pi(U_i^c)$ は閉集合. よって $V_i = \pi(U_i^c)^c$ は開集合.

$$\pi^{-1}([x_i]) \subset U_i$$

ゆえ

$$\{[x_i]\} \subset \pi_*(U_i) = V_i$$

すなわち

$$[x_i] \in V_i.$$